

KH482-J3

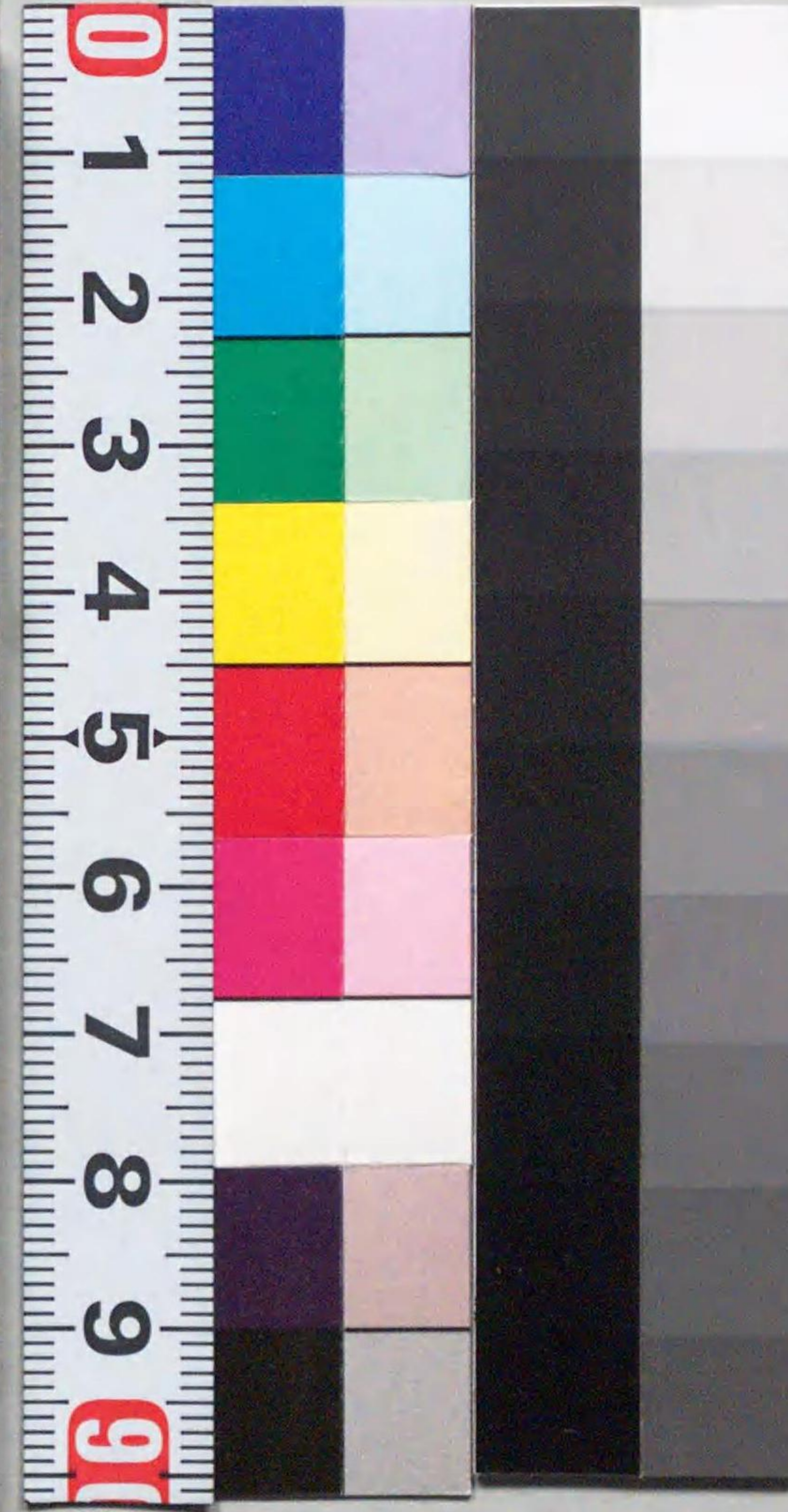


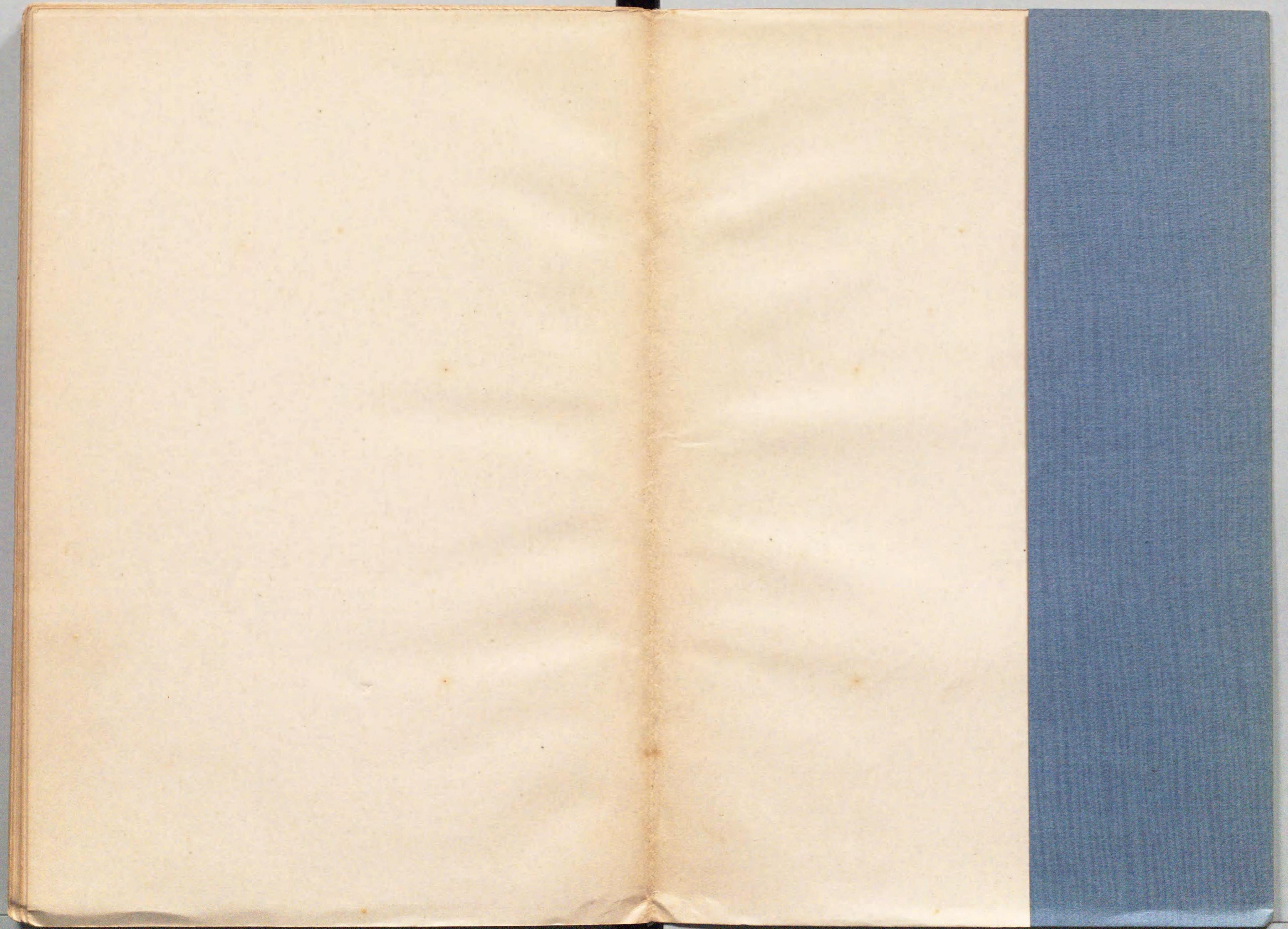
1201000720717

息 子

著 薰 内 山 小

書 齋 學 文 田 三
篇 三 第





小山内薰著

息子

東光閣發行



KH482-J3

目次

三人と三人(三幕).....一

捨兒(一幕).....八五

許嫁(一幕).....三三

息子(一幕).....一四七

目次



I種
W



1201000720717

三人と三人 (三幕)

人物

村田仁兵衛。請負師。四十二歳。

お絹。仁兵衛の妹。二十四歳。

おしん。お絹の妹。二十一歳。

仁太郎。仁兵衛の子。六歳。

木崎正治。洋畫の學生。二十三歳。

駒澤卓爾。法學士。二十八歳。

三人と三人

息子

小冬。藝者。二十一歳。(登場せず)

櫻川平孝。幫間。三十四歳。

延吉。芝居茶屋の男。四十歳。

安藤要次郎。村田組の支配人。三十五歳。

新造。村田家の小僧。十六歳。

お花。村田家の女中。十八歳。

場所

東京の下町。

時代

現今。

四

第一幕

村田家の店先。帳場。金庫。電話。

正面奥、古風な千本格子の障子。奥及び臺所への通路。

二階へ上がる階子段。大きな掛時計。

下手に小さき土間。土間の奥に建前の化粧柱など。

格子戸。戸外への通路。

朝の十時頃。

幕が明くこ、お絹が電話口に立つてゐる(低い踏臺に乗つて)。和服で袴をはいた木崎が、胡坐をかいて、新聞を讀んでゐる。白い皮の紐のついた繪の具箱が、その側に投げ出されてゐる。小僧の新造が土間で何か片づけものをしてゐる。

お絹。(電話口で) はあ、はあ……では、赤羽の方は指名入札になりますのでござい

三人と三人

五

ますね。はあ、分かりました……今月の二十日過ぎでございますね。はあ。はあ……
……ごうも有難うございます……それから、もう一つ伺ひますが、あの三聯隊の
厩舎でございますね。あれはお拂ひ下げになりませうか……はあ。なりますか……
……はあ、來月のなかば頃……はあ分かりました。ごうも有難う存じます。毎度勝
手な事ばかり伺ひまして、ごうも相済みません。では、いづれ安藤を遣し、すか
ら。はあ……兄でございますか。有難う存じます。相變らず、體が悪いものでご
ざいますから。はあ。ごうも恐れ入ります。では、御免下さいまし。ごうも有難
うございました。左様なら。(電話を切る。木崎の方へは見向きもせず、帳場へ来て坐る。小さな
手帳へ鉛筆で覚え書をする。金庫を明けて、契約書やうなものを二三種取り出して調べる。簿記帳を廣げ
て、算盤をはじきながら、彼を見比べる。それから、小僧に聲をかける) 新造、安藤さんはまだ見
えないかい。

新造。へい。けさはまだお見えになりません。

お絹。(時計を見上げて) 大層おそいちやないか。

新造。お上さんが少し悪いんださうです。お花さんがゆうべそんな事を言つてまし
た。

お絹。ごうしたんだらう。

新造。なあに、又いつもの胃痙攣でせう。たいした事ぢやありませんよ。

お絹。(手早く白紙に紙幣を包む) 之を持つてつてね。あたしが伺ふんだけれどもつてね。

新造。(上へ上がつて、金包を受けとつて) へい。

お絹。それで、安藤さんに、少し急ぎの用があるから、急いで来て貰ふやうにね。

新造。へい、畏りました。行つて参ります。(直ぐ格子戸から出て行く)

木崎。(顔を上げて、お絹に聲をかける) いそがしいんですね。

お絹。(木崎の方は見ずに、帳場を見ながら) ええ、いそがしいわ。あたしが稼がないけりや、
誰も稼ぐ人がないんだからね。

(途端に電話が掛かつて来る。木崎立ちさうにする)

お絹。お前さんが出たつて分かりやしないよ。(と言ひながら、立つて行つて、受話器をさる)
はい。はい。こちらは村田でございますが……ごなた様で……え。あら、いやだ。
頭梁かい……分かつたよ。分かりましたよ。え。え。ああ、その事ならね。あた
しが悪かつたんだよ。ゆうべ電話をかけようと思つて、すつかり忘れちまつたん
だよ……なに。馬鹿におしでないよ。いくら何だつて、そんな事の爲に商賣を忘
れやしないよ……冗談は措いてね。さつきも、それで、木場へ人を見せにやつた
んだがね。なんでも、船がシケに會つたとか何とか言ふのさ。嘘だか本當だか知
らないけどもね。でも、けふの夕方にはきつとはひるさうだからね。それまでの
ところ、外の方に掛かつてゐて呉れないか……え。大丈夫。念の爲に、安藤さ
んにも廻つて見て貰ふ事にするから……ああ。好いとも。それは大丈夫だよ。ち
やあ、左様なら。(電話を切る。又、帳場へ戻る。そして又帳簿を調べにかかる)

木崎。(顔を上げて) お絹さん。

お絹。(帳簿を調べながら) 何だよ。

木崎。今度の明治座、面白さうですね。

お絹。(帳簿を見詰めた儘、頭の前で手を振つて) 駄目。駄目。今そんな話をしちやあ。

木崎。だつて、その位の話をしたつて、頭の亂れるお絹さんぢやないぢやありませんか。

お絹。いけない。いけない。商賣をしてる時に、そんな話をしちやあ。(木崎を冗談らしく一寸睨んで) おとなしくして、黙つてゐるの。用が済むまで。

木崎。はい。はい。(笑ひながら、又新聞をひねくる)

(小僧の新造と支配人の安藤が、格子戸からはひつて来る)

小僧。只今。(と言ひながら、上へ上がつて、正面の障子を明けて、奥へはひる)

安藤。(土間に立つた儘、お絹に挨拶する) お早うございます。ごうも遅くなつて相済みま

せん。只今は又お見舞を頂きまして、いつもいつも恐れ入ります。

お絹。どうなの。お仲さんの様子は。

安藤。なあに、又いつもの胃腸なんでございますがね。女中に歸られらまつて、手がなないもんでございますからね。(上り框へ腰をかける)

お絹。おや。お金がぬないのかい。それはお困りだねえ。

安藤。國のお袋が悪いとか何とかいふ電報が來たんで、をどとひ出かけて行つたんでございますがね。どこへ歸つたんだか分かつたものぢやございませんよ。あいつこの頃色氣がつきやあがつたんでね。

お絹。まあ、あの山出しがねえ。油斷がならないねえ。

安藤。この頃は女中も使ひ難くなりましたよ。あれで、歸さなけりやあ、人權がどうしたの何のと言ふんですからね。そこへ來ると、お宅のお花さんなどは、模範女中だ。よく坊ちやんの世話を見ますねえ。

お絹。ほんとに、そこだけは感心さ。兄さんはあややつて、外に出てる方が多いし、

あたしは中々構つてゐられないし、あの子もお母さんに死なれてからは可哀さうさ。それを、お花がまるで親身のきやうだいのやうに見て呉れるんだからね。

安藤。ほんとに感心ですよ。(と、もうその方の話には餘り氣乗がしないやうに言ひながら、折カバンの中から小さい手帳を出して) 時に、けふは先づ木場へ行つて、それから陸軍省の方へ廻らうと思ひますが……

お絹。(これも直ぐ事務的になつて) さう。忙しくて氣の毒だけれども、今も頭梁から催促の電話さ。無理もないさ。もう三日も手を明けてるんだからね。一つカネ徳へ行つて嚴重に談判をしてお呉れよ。それから、あの、赤羽の工兵の方ね。あれはやつぱり指名入札ださうだから、大森さんのどこへ行つて、よくお願ひして來てお呉れよ。それから、あの、三聯隊の厩舎ね。あれは拂ひ下げになるさうだからね。序に廻つて、入札の日取をよく聞いて來てお呉れよ。

安藤。(一々手帳へ記入しながら) へい。畏りました。赤羽の一件と、三聯隊の厩舎ですね。畏りました。あの厩舎は随分古物ですが、何か思わくがおあんなさるのですか。

お絹。田舎から一寸言ひ込みがあるから、その方へ向けようかと思つてね。なあにいくらにもなりやしないと思ふんだけど、何しろ今月は又物入りだからね。

安藤。大きにね。(一寸考へて) 宜しうございます。精々運動いたませう。さう、さう、さう言へば、きのふ一寸、東京製鐵へ寄りましたら、近い内に増築があるさうですよ。

お絹。さうかい。で、やつぱり内の方へ廻りさうかい。

安藤。それがね。旦那が近頃あんまり顔を出さないもんだから、近藤組が大分手を廻してゐらしいんですね。

お絹。だからさ。あたしの言はないこつちやないんだよ。一軒でも二軒でも好いか

ら、古いお得意だけへは顔を出して下さいつて言ふんだけど、もう今ぢやあ、まるで商賣をほつたらかしてゐるんだからね。(一寸洗んで) でも、兄さんのお腹なかになつて見ると、氣の毒な事だらけだしね。さう、つけつけも言へないのさ。

安藤。(同情して) そりやあ、全くさうですよ。今、旦那を責めるのは全く可哀さうですよ。なんしろ、あんなに大事にしてゐた人に、急に逝かれちまつたんですからね。それに、柳橋のにやあ手ひどい目に會ふしさ。酒でも飲まなきやあ生きちやあゐられませんよ。

お絹。だから、商賣の方はあたしが引き受けました——兄さんは當分どうでも自分の思ふ通りになさいつて言つたのさ。それが、ああいふ好い人だからね。直ぐに悪いのに引つかかつてしまつたのさ。

安藤。小冬さんですか。たいした「新しい女」ださうですね。

お絹。とてもお話になりやしないんだよ。

安藤。(急に自分の用を思ひ出して、立ち上がる) これは大變。木場の用が急ぐのだつた。ちやあ、行つて参ります。

お絹。御苦勞だね。ちやあ、東京製鐵の方もなんとか専務さんに話して、近藤組に取られないやうにしてお呉れよ。

安藤。へい。それはもうその手筈にはしてあるんです。木村を毎日やる事にしてありますから。

お絹。ごうか、さうしてお呉れよ。家の暖簾に係はるからね。

安藤。大丈夫です。精々うまくやります。ちやあ御免。(格子戸から出て行く。間)

木崎。(顔を上げて) もう用は済みましたか。

お絹。(金庫へ物をしまつて、帳場を出て来る。笑ひながら木崎の側に坐る) ああ。やつと済んだ。

木崎。あの安藤つて奴は厭な奴ですわねえ。

お絹。なせ。

木崎。だつて、僕に挨拶一つしやしない。いつでも、なんだ、書生つぼがつて顔を
してやがる。

お絹。あれはああいふ人なんだよ。

木崎。でも、お絹さんにやあ、びよこくしてゐるぢやありませんか。

お絹。それは主人だもの、爲方がないやね。

木崎。お絹さんだつて、あいつにや厭に鄭寧ぢやありませんか。

お絹。それは、ああいふ人にやああしどかなけりやあ、動かないもの。それに、
あれでもお父さんの時代から出はひりをしてた人間だからね。

木崎。妥協だ。妥協だ。僕、お絹さんは好きなんだけれども、ああいふ所を見るの
は嫌ひだな。

お絹。また藝術家のやんちやが始まつたのね。

木崎。だつて、あいつ、いやに僕を邪魔者扱ひにしやあがるんだもの。

お絹。邪魔者扱ひなんかにしてやしないぢやないか。お前さんなんかとは話の出来ない人間だから、それで知らん顔をしてるんだよ。

木崎。それが癢に障るんですよ。僕を何かこの家へ悪い事でもしに來てる人間だと思つてやがるんだ。

お絹。もうおよしつたら。男がそんなにいつまでも一つ事をしつこく言つてるもんぢやないよ。お前さんはあたしのお友達さ。それで好いぢやないか。

木崎。それは好いけれども。

お絹。もう。おやめ、おやめ。それよりか、お前さん今明治座がどうとか言つてたぢやないの。

木崎。明治座なんかどうだつて好い。僕は、高松君だつて、もう嫌ひになつた。

お絹。そんな事を言ふもんぢやないよ。お前さんとあたしがかうして知り合ひになつたのも、高松さんのお蔭ぢやないか。

木崎。そりやあさうだけども、高松君もやつぱり役者だつてことが、この頃分かつて來たんです。あいつはお絹さんを口説いた事があるんですつてね。厭な奴だ。お絹。口説いたつて、こつちで聞かなけりやあ好いぢやあないか。

木崎。そりやあさうだけれど、僕はお絹さんの神聖が潰されたやうな氣がして不愉快なんだ。藝はうまい人だけど、獸のやうな人間だ。

お絹。(木崎の顔を冗談らしく覗き込んで) どうして、けふはさう御機嫌が悪いの。機嫌、直さない。

木崎。(目の前へ來たお絹の顔をぢつと見て、顔色を和らげる) 直しませうねえ。詰まらないや。人の事なんぞ議論したつて。

お絹。さうごもさ。

木崎。人の事なんかどうだつてよござんすねえ。お絹さんさへしつかりしてゐて呉れりやあ。

お絹。そりやあ、あたしは大丈夫よ。

木崎。僕は馬鹿ですわねえ。

お絹。なせ。

木崎。僕は蔭ぢやあお絹さんを随分信じてゐるんですよ。それでゐて、あなたの顔を見ると、つひいろんな事が言ひたくなるんです。どうしたんでせう。

お絹。それはあなたの星のせわよ。

木崎。僕の星はそんな星なんですか。

お絹。あなたの星はね。おとなしい癖に、廻り氣なのよ。

木崎。さうですか。

お絹。それに、もう一ついけない事があるの。

木崎。何です。何です。

お絹。氣が多いの。我儘星よ。

木崎。そんな事はありませんよ。

お絹。お前さん、お花に何か言やしない。

木崎。なんにも言ふもんですか。

お絹。でも、お花の様子がこの頃少し變よ。

木崎。そ、そ、そんな馬鹿な事があるもんですか。かりにも、女中などに。

お絹。大丈夫。

木崎。大丈夫ですとも。

お絹。怪しいもんねえ。

木崎。大丈夫ですつたら。

お絹。あたしは、こんなお婆さんだし、男見たいな人間だからねえ。

木崎。おや、おや、變な事を云ひ出しましたねえ。

お絹。(一寸考へて)それに、もう一つ心配な事があるのよ。

木崎。何です。何です。

お絹。名古屋の妹が歸つて来るの。

木崎。名古屋の妹つて。おしんさんの事ですか。

お絹。おしんがけふ急に歸つて来る事になつたの。

木崎。けふ。

お絹。それも、唯歸つて来るなら、好いんだけど。

木崎。どうかしたんですか。

お絹。亭主を嫌つて歸つて来るの。

木崎。へえ。そいつあおかしいなあ。おしんさんは自分で見初めてお嫁に行つたん

でせう。あの駒澤とかいふ人のところへ。

お絹。さうよ。それが、行つて見ると、まるで思つたやうな人ぢやないんだとさ。

木崎。だつて、もう行つてから何年になるんでせう。

お絹。丁度二年になるのよ。

木崎。變だなあ。

お絹。行くと直ぐその事は分かつたんだけど、あの子も我慢強い子だから、堪へる

だけは堪へたらしいのよ。だけど、もう、どうにも辛抱がし切れなくなつたらし

いわ。

木崎。道樂でもするんですか。

お絹。それが並大抵ぢやないんだとさ。

木崎。でも、おしんさんを虐待するんぢやないんでせう。

お絹。虐待どころか、そりやあ可愛がつてゐるのよ。

木崎。分からないなあ。

お絹。それだから、ちつとも料簡が分からないのよ。そりやあ好い人なんだけど、

まあ言つて見れば、だらしが無いのねえ。

木崎。その位の事なら、別れるの何のといふ問題が起りさうにもないがなあ、おしんさん、東京が戀しくなつたんぢありませんか。

お絹。あたしも、まあそんな事だらうと思つてゐるのさ。

木崎。きつと東京で一月も遊んだら、又歸る氣になるでせう。

お絹。あたしも、そんな事で濟んで呉れば有難いと思つてるのさ。

木崎。一體、あなたのきやうだいは、みんな遊び好きなんだから。おしんさんも随分家にゐる時は、はでにやつたさうですねえ。よく高松君がさう言つてゐましたよ。まるで、男の遊びなんですつてねえ。

お絹。なんしろ中々の負けず嫌ひなんだからね。一時は小林の奥さんなどと張り合つて、高松さんに車までこしらへてやつた事があつたつけ。

木崎。小林の奥さんを敵にするなどは痛快だなあ。僕は高松君を取り巻いてる婦人連の中で、一番あいつが嫌ひだ。亭主だつて、金はあるか知らないが、下等な奴

でさあ。高松君の一座などでは、奥さん奥さんて、みんな大騒ぎですが、何がそんなに有難いのかと思ひますねえ。あれで、金だつて、世間が思ふ程使はないんだつて言ふぢやありませんか。

お絹。使ふどころか。名は言へないけど、或役者なんか、あべこべに指環を買はせられたさ。

木崎。そんなこつてせうよ。役者といふ役者で、あいつに關係のないのは一人もないつて言ふんだから、厭になつてしまふなあ。だけど、おしんさんは痛快な人だなあ。むかし、高松君に口説かれた時なども、随分こつびごくやつつけたさうですねえ。

お絹。高松さんは、誰でも口説くんだからねえ。

木崎。女が役者を最負にするのは、大抵野心があるものにきまつてゐるのに、舞臺は好いが、人間は厭だとはつきり言つたんですつてねえ。豪い人だなあ。おしん

さんは。

お絹。いやに褒めるのねえ。あたしだって、高松さんの舞臺は好きだけど、人間は嫌ひだわ。

木崎。でも、おしんさんの方が徹底してゐますよ。あなたは、まだ弱いところがあつて駄目だ。高松君に會ふと、おろく／＼して、まるで口が利けないぢやありませんか。

お絹。お前さん、おしんが來ても、惚れちやあ駄目だよ。

木崎。(笑つて) 變な事を言ふなあ。大丈夫ですよ。第一向うで相手にしやしませんよ。

お絹。でも、あの人はお前さんのやうな人が好きなんだからね。

木崎。どうだか分かるもんですか。で、けふ、いつ着くんです。

お絹。もうぢき着くのよ。でも、お前さんは、けふは會はない方が好いわ。

木崎。なせです。

お絹。けふは、いろいろ向うの話や何か聞かなきやならないから。

木崎。さうですか。

(格子戸口から、主人村田仁兵衛、幫間櫻川平孝を連れて歸つて來る。二人とも酔つてゐる。直ぐ上へ上がる)

お絹。お歸りなさいまし。(平孝に) 平さん、御苦勞様。

(仁兵衛は寂しく笑ひながら、お絹と木崎の前を、きまり悪げに通つて、直ぐ二階へ上がつてしまふ)

平孝。(お絹に) あの、恐れ入りますが、お冷を一杯上げて下さいませんか。

お絹。ああ、今直ぐ持たしてやるよ。

平孝。では、一寸御免下さいまし。(と、直ぐ主人の後を追つて、二階へ上がる)

お絹。(後を向いて) お花や。

(奥で「はい」といふ聲がする。直ぐ後の障子が少し明く。お花が坐つて顔を出す)

お絹。坊やはどうしてて。

お花。おとなしく遊んで入らつしやいます。

お絹。旦那がお歸りだから、お冷を一杯、二階へ持つてつて上げておくれ。

お花。はい。(奥へはひる)

木崎。兄さん、相變らず酔つてゐるんですね。

お絹。ああ。

木崎。毒だなあ。ああ飲んぢやあ。

お絹。でも、爲方がないわ。寂しいんだもの。

(お花、奥の障子を明ける。コップに水を入れたのを盆にのせて持つて出る。直ぐ二階へ上がる)

木崎。考へて。だけご、寂しいからつて、酒を飲んで紛らしちまつちやあ詰まらな

いなあ。僕の先生ねえ。廣田先生なんか始終かう言ふんですよ。人間にとつて—

(お花、二階から降りて来る。直ぐ障子を明けて、奥へはひつてしまふ)

お絹。人間にとつて—どうしたのよ。

木崎。人間にとつて「寂しい」といふ事はご貴いものはない。だから、寂しい時は決してその寂しさを紛らしてしまふやうな事をしないで、その「寂しさ」を大事に抱きしめて、その寂しいといふ心持を繪にしろと言ふんです。兄さんなども、唯の請負師ぢやないんだから、あの寂しい氣持を爲事に集注すると、きつと好きなものが出来るんだがなあ。

お絹。そんな事言つたつて無理よ。繪かきと大工が一緒になるもんですか。

木崎。だから、お絹さんは分からないつて言ふんだ。建築家は立派な藝術家ですよ。お絹。また藝術家かい。厭になつてしまふねえ。

(平孝、二階から降りて来る)

平孝。(小聲で) お休みにになりました。(改めてお絹の前に平伏する) へい。先づ今日は。い

つもながら、御健勝の態を拜し、恐悦至極に存じ奉ります。(木崎に向つても、丁寧に禮をする) 先生、今日は。

お絹。いやだよ。平さん。いやに改まつてさ。

平孝。改まつてと仰しやいますが、これでも禮儀は心得てゐるんでげす。郷に入つては郷に従へさ。さうぢやござんせんか。(木崎に) ねえ、先生。

(木崎、唯笑つてゐる)

お絹。やつぱり酉の家なのかい。

平孝。へい。この頃はもう、ずつとあすこばかりで。却つて、その方がようござんす。

お絹。「新しい女」はどうして。

平孝。小冬さんでげせう。嬉しいね、あなたまでが「新しい女」などと仰しやるのは。

お絹。まだ脈はあるのかい。大分いけないやうな話を聞いてるんだけど。

平孝。脈は正に百度。

お絹。そりやあ熱だらう。

平孝。さう、さう、熱、熱。

お絹。そりやあ兄さんの方だけなんだらう。

平孝。いえ。なに、さういふわけでもないんですがね。

お絹。あたしぢやないか。ほんどの事を言つておしまひよ。この頃に、一つ恥を掻かしてやる積りなんだから。

平孝。へえ。あなたが。賛成。異議なし。實はあつしも癪に障つてたまらないんです。

お絹。とても脈はないんだらう。

平孝。ないといふのはあんなぢやありません。なさ過ぎるといふ奴でげす。何し

ろ付き者が悪うがさあ。

お絹。小説家だらう。それだつて、あたしはちやんと知つてるんだ。

平孝。それまで御存じとは、ごうも、はや、實に恐れ入りやしたな。小冬さんも、飛んだ悪物食ひさね。あんな、駈け出しの文士なぞを。

お絹。でも、あれで、中々今売れつ子なんだとさ。

平孝。売れつ子にもいろいろありますね。あれなぞは、先づ干物の売れつ子だ。菊屋へ行くと、ああいふのが澤山店に列んでゐますよ。いやに、こち／＼してゐてまるで石を叩くやうだ。

木崎。(急に口を出す) お絹さん、一體誰の事なんです。

お絹。え。村岡翠さんよ。

木崎。へえ。村岡さんが、小冬さんの好きな人なんですか。

お絹。さうよ。知らなかつたの。

木崎。ちやあ、いづれ村岡さんの作物に惚れたとか何とか言ふのが始まりなんです。

お絹。さうよ。いつか新派でもやつた『象牙の塔』ね。あれが氣に入つたのが始まりなんだとさ。

平孝。さう、さう。その『蟻の塔』だか『象牙の塔』だか知らないが、なんでも、その塔で、すつかり登り詰めてしまつたんですね。

木崎。(暫く考へてゐたが) さうですか。そりやあ無理はないな。あいつは全く巧いからな。「日本の若きドストエフスキイ」つて評がある位ですからね。あれが分かるんならたいした女だ。

平孝。褒めちやあいけないね、先生。

木崎。だつて、あれは大したものだよ。先づ明治大正を通じての傑作だらうね。平孝。困つたね。

お絹。(木崎に) ほんとに、そんなに好いものなの。

木崎。誰にでも聞いて御覽なさい。あれを褒めない者はありません。(二可考へて) こりやあ何ですね。氣の毒だけでも、ここの兄さん、諦めなけりや駄目ですね。つまり、あれですよ。時代の相違ですよ。藝者だつて、若い奴は時代の影響は受けずにあつてまいからね。

平孝。(お絹に氣兼ねしながら) どうもひどい事になつて來ましたな。

木崎。ここの兄さんだつて、意氣な人だけれど、もう何しろ四十代でせう。相手はまだ三十にならないんですからねえ。それに、あの小説が分かるやうな女ぢやあ先づ絶望ですね。

平孝。(もぢくしてゐたが、急に掛時計を見上げて) やあ。これは大變。師匠のところに寄合があるのを、すつかり忘れてゐた。(お絹に) ぢやあ、どうも。旦那がお目覺めになりましたら、どうぞ宜しく。いづれ又。

お絹。もう歸るの。まあ好いぢやないか。

平孝。うちの師匠は、馬鹿に時間のやかましい人ですから。

お絹。(その間に、手早く、白紙へ金を包み、平孝の膝の横へ置く) さう。ぢやあ又來て頂戴。

平孝。(白紙に目をつけ) どうもいけませんねえ。(と言ひながら、直ぐ金包を押し戴く) でも、

折角だから頂戴して參ります。ぢやあ、旦那へ宜しう。先生、御免。(こゝ、逃げるやうに出て行く)

お絹。(笑つて) 平孝の奴、びつくりして歸つて行つてしまつた。(木崎に) お前さんがあんまり遠慮なしに物を言ふもんだから、どうして好いか分からなくなつちまつたんだよ。

木崎。太鼓持なんて、やつぱり時代おくれですよ。兄さんも、あんなものを相手にしてゐちや逆も駄目ですね。

お絹。でも、兄さんは弱い人だから、お供がなけりや、どこへも行けないんだよ。

木崎。だから、時代おくれたつて言ふんだ。とても村岡さんの敵ぢやありませんね。
お絹。でも、兄さんは一度思ひ詰めたら、中々諦める人ぢやないんだよ。それに、
藝者なんてものは、やつぱりお金次第だからね。まあ、やるだけやつて見る事さ。
木崎。(黙つてゐる)

お絹。(掛時計を見上げて) どれ、あたしもステエションまで行つて来ようか。木崎さ
ん、あなたも研究所へ行くんでせう。

木崎。けふは何だか行きたくないから、やめます。

お絹。さう怠けちや駄目よ。この頃はちつとも勉強しないぢやないの。好いから入
らつしやい。

木崎。けふはごうしても厭です。

お絹。でも、けふは家もごたごたするだらうと思ふし——

木崎。ですから、あなたの歸らない内に歸れば好いでせう。

お絹。きつと、さうして頂戴よ。妹の手前もあるしするからね。

木崎。大丈夫ですよ。

お絹。ぢやあ、出かけるわ。(奥へ向いて呼ぶ) 新造、新造。

〔へえい〕といふ返事が聞える。直ぐ奥の障子を開けて、小僧が出て来る〕

お絹。お前、氣の毒だけれど、あたしと一緒にステエションまで行つてお呉れな。

新造。へい。

お絹。それから、お花に肩掛を持つて來させておくれ。

新造。へい。(奥へはひる)

木崎。車は入らないんですか。

お絹。電車で澤山。歸りはタキシがあるし。近いんだもの。

木崎。東京驛ですか。

お絹。ええ。

(お花、スカーフを持って来る)

お絹。坊やを頼んだよ。お土産を買つて来てやるから。

お花。はい。

お絹。旦那がお起きになつたら、唯ちよつと出かけたと言つとけば好いよ。(木崎に)

お前さんもなんにも言はずに置いといて下さいよ。

木崎。ええ。

(小僧、烏打帽子を冠つて出て来る)

お絹。(立ち上がりながら、お花に) ぢやあ、あとを頼むよ。坊やを離れちやいけないよ。

お花。畏りました。

お絹。(木崎に) 濟まないけど、ほんとにけふは早く歸つて頂戴よ。

木崎。大丈夫。歸りますよ。安心して入らつしやいよ。

お絹。(小僧に) ぢやあ、新造お出で。

(お絹、新造を連れて、格子戸から出て行く。お花、直ぐ立つて、奥へ行かうとする)

木崎。お花さん、お花さん。

お花。(畏つて) 何でございます。

木崎。君、僕の手紙見て呉れた。

お花。存じません。(と言ひながら、どんどん奥へはひつてしまふ)

木崎。(苦笑して) おや、おや。

(仁兵衛、二階から降りて来る。酔が少しさめてゐる)

仁兵衛。やあ。木崎君。さつきは失敬しました。お絹はどつかへ行きましたか。

木崎。(躊躇して) なんだか、用があるとか言つて、新造君を連れて出て行きましたよ。

仁兵衛。ああ、さうですか。ぢやあ、商賣用で出かけたんでせう。(苦笑して) どうも僕は家の事はちつとも分からないもんだから。

木崎。でも、お絹さんが、しつかりしてるから好ござんすよ。

仁兵衛。何もかも任せつ切りで濟まないとは思つてるんですがね。僕はもうこんな體になつてしまつたんだし、却つて愁じつか手を出さない方が好いと思つてるんですよ。木崎君、まあ精々お絹を慰めてやつて呉れ給へ。

木崎。(躊躇しながら) ええ、慰めるなんて事は出来ないかも知れないけれど、まあ暢氣な事を言つて、笑はす位なことはね。

仁兵衛。いや、どうして。お絹は眞面目に君を頼りにしてるんですから。どうか、

まあ、末長くつきあつてやつて下さいよ。

木崎。それは僕の方から望むことです。

仁兵衛。(立ち上がつて) ぢやあ、失敬だが、僕又ちよいと出かけますから。まあ、ゆつくり遊んでゐて下さい。

木崎。(或意味をもつて) 又出かけるんですか。

仁兵衛。人間も、もう、かうなつちやあ、おしまひですよ。

木崎。そんな事があるもんですか。

仁兵衛。男のある女の尻を追ひ廻すなんて、男子の恥辱ですね。

木崎。そんな事があるもんですか。男があつたつて構はないぢやありませんか。戦つて勝つんですね。

仁兵衛。(又坐る) でも、相手が若いんですからね。

木崎。若いから、必ずしも勝つとは限らないでせう。勝負は眞情のあるなしですよ。

仁兵衛。ほんとに、さう思ひますか。

木崎。ほんとにさう思ひます。

仁兵衛。有難う。それを聞いて勇氣が出て來ました。ぢやあ、失敬して、行つて來ます。(奥の方を向いて) お花、お花。

(「はい」といふ聲がする。お花、奥から出て來る)

仁兵衛。仁太郎はとうした。

お花。あちらで遊んで入らつしやいます。

仁兵衛。ちよいと連れといで。

お花。はい。(奥へはひる)

木崎。仁太郎さんは、ほんとにおとなしい子ですねえ。いつも、ゐるんだかゐらないんだか分かりませんねえ。

仁兵衛。あの子も可哀さうですよ。母親がゐなくなつてから、なんだか急に沈んだ子になつてしまひましてねえ。

(お花。仁太郎を連れて、出て来る)

仁兵衛。(仁太郎を自分の側へ引き寄せて) とうした、坊主。何をしてゐた。

仁太郎。お花と繪をかいてゐた。

仁兵衛。何かほしいものはないか。

仁太郎。鉛筆と帳面ほしいの。

仁兵衛。さうか。それはお安い御用だ。財布を出して、金をお花に渡す。お花、これで買ってやつてくれ。なりたけ紙の好い奴を買つてやれよ。

お花。はい。

仁太郎。お花、買ひに行かうよ。

お花。はい。お父様がお出かけになつたら、直ぐ買ひに参ります。

仁太郎。お父ちゃん、お出かけするの。

仁兵衛。ああ。直ぐ歸つて来るからね。おとなしくお花と遊んでゐるんだよ。

仁太郎。ああ。

仁兵衛。(思ひ出したやうに、木崎に向つて) ああ、さう言へば、君、こなひだ何とかの本が欲しいと言つてゐましたね。

木崎。ドガでせう。あれは高いから諦めつちまひました。

仁兵衛。五十圓だとか言つてゐましたね。

木崎。ええ

仁兵衛。(財布から金を出して、木崎の前へ出す) ぢやあ、失敬だけど、僕が買つて上げませう。

木崎。だけど、それは。

仁兵衛。まあ、僕の志だから、取つて置いて下さい。

木崎。さうですか。ぢやあ、まあ、一時拜借して置きますわ。(金を懐へ入れる) どうも有難うございました。

仁兵衛。(お花に) ぢやあ、行つて来るからね。仁太郎を頼むよ。

お花。はい。行つてらつしやいませ。

仁太郎。行つてらつちやい。

木崎。行つてらつしやい。

(仁兵衛、出て行く。木崎、ちつとお花の顔を見る。お花、顔をそむける)

お花。さあ、坊ちゃん、帳面買ひに行つて参りませう。

仁太郎。ああ。

(お花、急いで仁太郎に下駄をはかせ、その手を引いて、外へ出て行つてしまふ。木崎、笑ひながら、元ゐたまゝころへ戻り、胡坐をかく。懐から寫生帳を出して、空想で何か繪をかく。稍長き間)

(女の笑ひ聲が聞こえる。お絹とおしんが、小僧に荷物を持たせて、歸つて来る。二人は夢中で話しながらはひつて来るので、はじめ木崎のゐるのに氣がつかない。上へ上がつて、はじめて、それに氣がつく)

お絹。(立つた儘、稍鏡く) まあ、木崎さん。あなた、まだゐたの。

(木崎、平氣な顔をして、二人を見上げる。お絹、木崎を睨む。木崎、おしんの顔をちつと見る。おしん、姉の後に立つた儘、ちつと木崎の顔を見る)

—幕

第二幕

第一幕と同じ舞臺。第一幕より五日を経たる朝の十一時頃。

おしん。木崎が、部屋の掃除をしてゐる。おしんは手拭を姉様冠りにして、赤い襷をかけてゐる。木崎は鳥打帽子を冠つて、袴の股立をさつてゐる。おしんがはたきをかけて歩く姿を、木崎が箒ではいて廻る。

おしん。駄目ねえ、木崎さん。そんなにごみをあつちへ集めたり、こつちへ集めたりしちやあ。ごみは一つところへ集めるものよ。

木崎。さうですか。(不器用に掃く)

おしん。駄目。駄目。それぢやあ折角掃いたごみが又散らかつちまふわ。ちよいと貸して御覽なさい。(はたきを持った儘、木崎の箒をさつて掃く) どう、うまいでせう。

木崎。成程ね。

おしん。感心してゐちや駄目よ。さあ、やつて御覽なさい。男だつて掃除ぐらゐ稽古しとくものよ。(箒を出す)

木崎。いや、よしませう。とても駄目です。僕は今度はたきの係りになりませう。

(さ、おしんの手からはたきを取る。その時、一寸おしんの手を握る)

おしん。おや。どこでそんな事を習つたの。

木崎。(態もぢもぢして) 別に習つたといふわけぢやないけれど……その位の事は。

おしん。ひとりで考へつくと云ふの。嘘、嘘。なかなか馴れてるわ。可愛らしい顔をしてゐても、なかなか隅へ置けないのね。

木崎。(頭を抱へて) 困るなあ、僕、そんなに言はれちやあ。

おしん。姉さんも、きつとその手でやられたんだよ。

木崎。僕、僕、姉さんと何でもありやしませんよ。

おしん。駄目、駄目。ちやんと知つてゐるわ。おう恐い。

木崎。何も恐い事なんかありません。僕は何の束縛も受けてやしません。あなたの方が、よつばど束縛のある體だ。

おしん。(むきになる) なに。なんの束縛があつて。

木崎。御亭主があるぢやありませんか。

おしん。亭主があつたつて、別れてしまへば、自由の體だわ。

木崎。別れようたつて、別れられないんぢやありませんか。

おしん。別れてよ。きつと別れるわ。もう別れてるんだわ。

木崎。でも、籍が向うにある間は、まだあなたの體ぢやありませんよ。

おしん。籍だつて、今に抜いて貰ふわ。いやなこつた。あんな遊治郎なんぞ。

木崎。なんて、いばつたつて、縛られてゐるんですよ。好い氣味だ。

おしん。まあ、憎らしい。

木崎。憎らしけりやあ、どうでもして御覽なさい。

おしん。きつと、どうしてもよくつて。

木崎。ええ、ようござんすとも。

(おしん、いきなり木崎の頸に手を廻す。木崎、わざと知らん顔をして、ぢつと立つてゐる。おしん、力任せに、木崎の頸をしめる)

木崎。(頓狂に) あ、痛い、痛い。

(途端に、奥から、お絹が出て来る。お絹は病人らしく、髪をぐるぐる巻にして、兩方のこめかみに膏薬を張つてゐる。三人、暫く無言。おしん、木崎を離れる)

お絹。(稍暫くして) おしんちゃん。

おしん。(平氣で) え。

お絹。何をしてゐたの。

おしん。(平氣で) 木崎さんが、あんまり憎らしい事を言ふから、ひどい目に會はしてやつたの。

お絹。(間を置いて)馬鹿に仲が好いのね。

おしん。(直ぐ)仲が悪いのよ。

お絹。(嘲笑する)ふん。

おしん。おや。姉さんでもないのね。

お絹。まあ、好いわ。(木崎に)木崎さん。濟まないけど、暫く家へ來ないで下さいな。

木崎。なせです。

お絹。あなたはあんまり人づきが好過ぎるわ。もう少し人づきが悪くなつたら、又入らつしやい。

木崎。(哀願するやうに)お絹さん。お願いだから、そんな變な事を言はないで。

お絹。まあ、なんでも好いから歸つて下さい。

木崎。(素直に)ぢやあ、けふは歸りますけれど。

お絹。もう來ちやいけなくつてよ。おしんちゃんのゐる間に、又來たら承知しない

から。

おしん。まあ、姉さん、そんなに言はなくつたつて。木崎さんに悪いところは無いんだわ。

お絹。まあ、あなたは黙つて入らつしやい。仲が悪い筈だつたわね。

おしん。(ぶつけるやうに)はい。はい。

お絹。(木崎の前へ進む)さあ、歸つて頂戴。直ぐ歸つて頂戴。

木崎。今歸りますよ。

お絹。(木崎の肩を押す)さあ、お歸りお歸りつたら。

(木崎、もう何も言はずに、逃げるやうに、外へ出てしまふ)

おしん。(暫くして)姉さん、随分邪慳にするのねえ。

お絹。(いつの間にか顔が和らいである)あれで丁度好いのよ。お坊ちやんでしやうがありやしない。

おしん。でも、可愛らしい人だわ。今に豪い人になりさうだわ。前の小島さんなどは比べものにならなくてよ。もつと大事にしておやりなさいよ。
お絹。だけど、おしんちゃん、あんまり若い者にからかつちやあ駄目よ。直ぐ本氣にするから。

おしん。大丈夫よ。あたしぢやありませんか。

お絹。お前さんの方は大丈夫でも、向うがああいふお坊ちやんだからね。

おしん。安心してらつしやいよ。あたしだつて、まだ自分の體になり切つたといふわけぢやあなしね。

お絹。だからさ。あたしもそれを心配してるのさ。ほんとに、お前さん、しつかりしてゐておくれよ。

おしん。姉さんも年をとつたわね。大丈夫よ。

(格子戸を明けて、芝居茶屋の男の延吉がはひつて来る)

延吉。へい、こんちは。(おしんを見て) おや。どうも。これはお珍しい。(上がり框に頭をすりつけて) 暫くでございます。どうもすつかりお變りになりましたな。

おしん。延さん。達者で結構だね。

延吉。へい。お蔭様で。相變らず、こちらの御厄介にばかりなつてをります。(お絹を見て) お加減が悪いさうで。どうも、ちつとも存じませんでしてね。あんまりお見えにならないから、どうなすつたかと思つてゐましたが、電話で伺ふのも何だと存じましてね。

お絹。誰に聞いて。

延吉。御病氣の事ですか。いえ、高松先生のごこの男衆が、きのふ電車中で安藤さんにお目にかかつたんださうでして。

お絹。ああ、さう。

延吉。先生も、ふだん丈夫な方だけに心配だなんてね。それで、あつしにけふ是非

様子を伺つて来てくれつてね。

お絹。なあに、なんでもないんだよ。少し頭痛がするだけさ。かうやつて起きてる位なもの。

延吉。へえ。それで、實は今あつしも安心をしたわけですが、その位なら、お芝居へ入らつしやいな。却つて、お氣が晴れますよ。

お絹。あたしもさう思つてるんだけど、おしんちゃんか歸つて來たりして、何だかごたごたしてるものだからね。

延吉。ですから、お二人で入らつしやいましたな。

お絹。それが、まださう行かないんだよ。

延吉。(分らないで、左様ですか。

(間)

おしん。延さん、先生は相變らず。

延吉。もう、いつも、あなたのお噂ばかり。あんな方を田舎で埋うまらせるのは惜しい

なんてね。始終さう言つて入らつしやいますよ。

おしん。うまく言つてるよ。相變らず、小林の奥さんならう。

延吉。(態ま目めを丸まるくて) ぎ、ぎ、どう致しまして。もう、この頃は、奥さんなんぞ相手になさりやあしません。奥さんの方でも、もうこの頃はぶつつりです。ねえ、

お絹さん。

お絹。(おしんに) そりやあ、さうよ。

おしん。へえ、さう。やつと分かつたのねえ。先生も人が好いからねえ。

延吉。ですから、どうぞお二人で入らして下さいまし。どんなに先生がお喜びになるか分かりません。

おしん。さう。

延吉。(懐ふちから手帳を出して) 如何です。明後日は。明後日なら、東のうづらの好いところ

がございませう。

お絹。まあ、あとで相談して、電話をかけるから。

延吉。御相談なぞなさるにやあ及ばないぢやありませんか。(帳面へ何か書く) 明後日

一問とつて置きますよ。

お絹。この人に會つちやあ、とてもかなはないわ。(手早く金を紙に包む)

延吉。(立ち上がる) では、御免を。これですつかり安心しました。では、明後日。序

幕が好いんですから、どうぞお早く。お待ち申してをります。(お絹、黙つて金を出

す) どうも、恐れ入りますねえ。ちよいと上がったばかりなのに。(金包を載いて直

ぐ懐中する) 御遠慮なしに頂いて置きます。では、御免を。

(延吉が格子戸を明ける。格子戸の外に、おしんの夫の駒澤卓爾が洋服姿で立つてゐる。延吉、少し

あとへ下がる。駒澤、はひる。延吉、お絹達の方を見る。お絹もおしんと黙つてゐる。延吉、そこそ

に出て行く)

駒澤。(お絹に挨拶する) 姉さん、暫くでした。

(おしん、直ぐ立つて、奥へ行かうとする。お絹、引き留める。おしん、又坐る。平氣で顔を上げてゐ

る)

お絹。(駒澤に) まあ、お上がんなさい。

(駒澤、黙つて靴をぬぎ、上へ上がる。おしんの顔は見ないで、お絹の前に、いきなりひれ伏す)

駒澤。姉さん、全く僕の不徳の致すところですよ。どうか許して下さい。

お絹。いつ、こつちへ入らしたの。

駒澤。濟みません。けさ参りました。(少し顔を上げる)

お絹。そんなにして入らしちやあ、お話が出来ませんわ。

駒澤。(普通の姿勢になる) おしんに、なんにも悪いところはあります。みんな僕が悪

いんです。

お絹。いや、いや。膝を崩さなくちや。洋服がたまりませんわ。

駒澤。(素直に、直ぐ膝を崩す) 崩しました。

お絹。お詫なら、あたしの方でしなくちやなりませんわ。無断で家を飛び出したり
なごして。たとひ何があらうと、それはおしんが悪うございます。

駒澤。いいえ。それも僕が悪いです。僕は何一言も申すところはありません。

お絹。お父さんはなんて言つてらしやるの。

駒澤。めちやめちやに叱られました。

お絹。お母さんは。

駒澤。お袋にも怒られました。

お絹。ちやあ、おしんの罪は勘辨して下さるんですか。

駒澤。勘辨するも、しないも、僕はもう一遍どうしても歸つて貰ひたいと思つてや
つて來たんです。

お絹。でも、あなたは大層お氣に入りの方があるんだつて言ふちやありませんか。

駒澤。それはありました。併し、僕はそれが爲におしんを捨てようと思つた事は唯
の一度もありません。

お絹。でも、そりやあ、あなた勝手過ぎますわ。

駒澤。(狼狽して) ですから、ですから、それも親父に散々叱られました。ですから、

もっそれとも絶縁しました。もう、これから、全く新しい生活にはひります。僕
は始めて目が覚めました。

お絹。(おしんに) おしんちやん、どう。

おしん。(黙つて笑つてゐる)

お絹。お前さんの考へ一つよ。

おしん。駄目よ。うちの人は。口がうまいんだから。

駒澤。(狼狽して) そ、そ、そんな。今度は本當に悔悟したんだ。

お絹。男がそんなに安つばく悔悟するもんぢやなくつてよ。

駒澤。(いきなり、おしんの前にひれ伏す) あやまる。あやまる。本當にあやまる。もう大丈夫だから、安心してくれ給へ。もうどんな事があつても大丈夫だ。親父もお袋もどんなに君の歸るのを待つてゐるか分かりやしない。どうか両親に免じて、許してくれ給へ。

おしん。ほんとにお父さんやお母さんには濟まないんだけど、あんまりあなたがひどいんだから。

駒澤。(又ひれ伏して) だから、もうその事は言はないで呉れ給へ。僕が悪いんだから。お絹。(おしんに) おしんちゃん、ごう。男の方がこんなにあやまつてゐるんだから。それにお父さんやお母さんに對してもね。

おしん。(急に) 駄目、駄目。いつもそれで遣られて來たんだから。もう、お父さんやお母さんに濟まない位は構はないわ。あたし、ごうしても歸るのは厭。

駒澤。(おしんの顔をちつき見る) こんなにあやまつても許してくれないの。

おしん。厭です。厭です。

駒澤。(少し強くなる) ぢやあ、僕もここは動かない。君が歸つてくれるまでは死んでも動かないから。

おしん。(立ち上がる) ぢやあ、あたしも出て行くばかりです。あなたは自分の家からあたしを追ひ出しただけでは満足しないで、あたしの家にもゐられないやうにしようと言ふんですね。

駒澤。(又弱くなって) ね、君、お願いだから歸つてくれ給へ。これからは、一舉一動君の言ふ通りにするから。

お絹。(おしんに) おしんちゃん、歸つて上げたら、ごう。

おしん。(立つた儘) 厭、厭。

駒澤。それぢやあ、君は僕が厭になつたんだね。

おしん。ええ、厭になりました。

お絹。(おしんに) まあ、お前、そんな。

おしん。だつて、さうなんですもの。爲方がないわ。

駒澤。いや、そんな筈はない。それは自分で自分を欺いてゐるんだ。愛はあるんだ。確に愛はあるんだ。唯、僕の人格を信用しないんだ。誤解さへとけば、何でもないんだ。

(おしん、黙つて、外へ出て行かうとする)

お絹。(少し驚いて) おしんちゃん、何處へ行くのよ。

おしん。だつて、あたし、こんな所にはゐられないわ。

お絹。ゐられないたつて、ここはお前さんの家ぢやないか。

おしん。いいえ。もう、あたしの家ぢやないわ。一度お嫁に行つた以上は、もうあたしの家ぢやないんだわ。

お絹。そんなら、名古屋へ歸れば好いちやないか。

おしん。いいえ。あすこも、あたしの出て來た家だから、もうあたしの家ぢやないわ。

お絹。ぢやあ、どうしようつて言ふの。

おしん。もう、あたしは何處にも家はないんだわ。(下へ降りて下駄をはく)

お絹。まあ、どうしたつて言ふのよ。

おしん。左様なら。(どんどん出て行つてしまふ)

(お絹、暫く呆然と後を見送る。駒澤は、その方を見ないで、ちつきとしてゐる。やがて、お絹、駒澤の方を向く)

お絹。駒澤さん。

駒澤。はい。

お絹。あなたも意氣地なしねえ。

駒澤。驚いて) え。

お絹。自分の女房に逃げられるなんて。少し、しつかりしなさいよ。

駒澤。でも、僕は弱いんですから。

お絹。弱つたつて、女房の外に二人も三人も女をこしらへてゐるんでせう。それなのに、女房一人つかまへてゐる事が出来ないなんて、随分な意氣地なしだわ。

駒澤。でも、それは。

お絹。もう、あたしもこの事には口は利きませんから。あなたに腕があるなら、首根つこへ繩をつけてでも、おしんを連れてお歸りなさい。あなたの責任だわ。

駒澤。そりやあ、僕の責任です。

お絹。その責任のある人が、今の態たらくは何。男の癖に、びよこびよこあやまつたりなんかしてさ。その揚句に、たうとう逃げられちまつたぢやないの。

駒澤。心當りがあるなら教へて下さい。僕、どこへでも探しに行きますから。

お絹。心當りなんかありやしなくつてよ。

駒澤。あの、高松とかいふ新派の役者のどこへ行つたんぢやないでせうか。

お絹。そんな事が分かるものですか。どこへでも自分で探しに行つて、自分で捕まへて入らつしやいよ。その位の事が出来なきやあ、人の亭主になる資格はないわ。

あたしや、もう知らなくつてよ。馬鹿々々しい。(とんとんと奥へはひつてしまふ)

(駒澤、泣き出しさうな顔になる。途端に格子戸が明いて、主人の仁兵衛が歸つて来る。仁兵衛は暗い顔をしてゐる。駒澤を見て、何か言ひさうにしたが、又黙つてしまつて、逃げるやうに二階へ上がらうとする)

駒澤。(泣き聲を出して) 兄さん。

仁兵衛。(これも聲を絞つて) 僕には分からない。僕には分からない。(と云ひながら、二階へ上がつてしまふ)

(お花が仁太郎を連れて、外から歸つて来る。仁太郎、飴屋の賣る旗を持つてゐる)

幕

第三幕

第二幕と同じ舞臺。第二幕より五日を経たる夜の七時頃。

主人仁兵衛とその子の仁太郎が、寂しく食卓を圍んでゐる。仁兵衛は手酌で酒を飲んでゐる。仁太郎は飯を食べてゐる。お花が給仕をしてゐる。

仁兵衛。お花、この頃、木崎さんがちつとも來ないやうだな。

お花。ええ、ちつともお見えになりません。

仁兵衛。どうしたんだらう。體でも悪いのかしら。

お花。さあ、どうでございませうか。

(間。仁兵衛、酒を飲む。仁太郎、飯を代へる)

仁兵衛。(仁太郎に) 好い子だ。よく喰べるな。

仁太郎。お父ちゃん。

仁兵衛。なんだ。

仁太郎。これから、毎晩一緒に御飯をたべる。

仁兵衛。ああ。これから、毎晩一緒に喰べてやる。

仁太郎。一緒に寝てくれる。

仁兵衛。ああ。寝てやることも。

仁太郎。もう、よそへお泊りしない。

仁兵衛。ああ、しないとも、しないとも。

仁太郎。名古屋の伯母ちゃん、もう歸つたの。

仁兵衛。ああ、もう駒澤の伯父さんそこへ歸つてしまつたんだ。

仁太郎。うちの伯母ちゃんは。

仁兵衛。(一寸詰まつて) うちの伯母ちゃんは、お父ちゃんの御用で、田舎へ行つたんだ。

仁太郎。いつ歸るの。

仁兵衛。あさつて。ああ。あさつて歸つて來る。

仁太郎。僕、寂しいんだよ。お父ちゃん、きつとあしたから、お出かけしないでね。

仁兵衛。大丈夫だ、大丈夫だ。

仁太郎。(お花の方へ茶碗を出して) お茶。

お花。はい。(茶を汲んでやる)

仁兵衛。(仁太郎に) お茶を飲んだら、お花と奥へ行つて、三十分ばかり遊んで、それ

から、寝るんだぞ。お父ちゃん直ぐあとから行つてやるから。

仁太郎。ああ、きつとだよ。

仁兵衛。御飯をたべて直ぐ寝ると毒だからな。少し遊んでから寝るんだよ。

仁太郎。ああ。お父ちゃん。僕、繪うまいんだよ。今に木崎さん見たいな繪かきになるんだ。

仁兵衛。さうか。それは豪いな。(お花に) さあ。ここは好いから早く連れてつて遣れ。

お花。はい。(仁太郎に) さあ。坊ちゃん。参りませう。

仁太郎。(立つて) お父ちゃん、きつと來てね。

仁兵衛。(仁太郎の手をこつて) ああ。きつて行くよ。

(お花、仁太郎を連れて奥へはひる)

(稍長き間、仁兵衛、酒を飲む。格子戸、靜に明く、詰問平孝、はひつて來る)

平孝。おさな子がひとり飯食ふ秋の暮か。これは。ごうも、何事でげす。

仁兵衛。(知らん顔で、手酌で酒を飲んでゐる)

平孝。(どんどん上へ上がつて來る) 旦那。(仁兵衛黙つてゐる。聲を高くして) 旦那。

仁兵衛。(煩ささうに) 何だな。

平孝。御立腹でげすか。これは恐れ入りましたな。(態さ勢よく) さ、出かせませう。

いけませんな。そんなにくすぶつちまつちやあ。

仁兵衛。(盃をやる) まあ、一杯やれ。

平孝。(盃を載いて) へ、恐れ入ります。何は。お絹さんは。

仁兵衛。誰もゐない。

平孝。ちやあ、なほのこつた。出かけませう。出かけませう。

仁兵衛。もう遊びはやめた。

平孝。御冗談もんですせ。飛んでもない。

仁兵衛。時勢にやあかなはねえ。もうおれなどの出る幕ぢやねえよ。

平孝。旦那、そんな事は言ひつこなしだ。高があんな文學藝者の一人や二人。まだ

まだ、旦那の意氣の分かるやうなのがゐますよ。

仁兵衛。駄目だ。駄目だ。もうおれなどの遊ぶ世界はねえ。

平孝。旦那、どうしたんです。あんな鼻つたらしの事が、そんなに氣になるんです

か。

仁兵衛。あいつの事ばかりぢやねえ。おれはもうこの頃の藝者といふ藝者に呆れ返つたんだ。

平孝。旦那、そりやあ、ちと御量見が狭いといふもんでげすせ。何も今日の藝者衆だつて、みんながみんな、さうだといふわけぢやありませんせ。

仁兵衛。藝者も婦人雑誌を讀んで、西洋の活動寫眞役者に夢中になるやうぢやおしまひだ。

平孝。モンロオ・サルスベリかね。小冬さんは、ありやあ別ですよ。あんなな珍物だ。さう澤山ゐやしませんよ。

仁兵衛。なあに、秋香だつて、小系だつてさうだ。昔はお客の話が藝者に分からなかつたもんだが、今ぢやあ藝者の話が客に分からなくなつたんだ。ひでえ世の中よ。今に洋服を着て、オオトバイでお座敷へ来るやうになるだらう。恐ろしい。

恐ろしい。

平孝。まあ、なんでも好いから参りませう。旦那は一體、惚れつばいからいかねえのだ。小冬さん位の女なら、箒で掃く程ありますぜ。まあ、黙つて、萬事あつしの方寸に任せて、来て御覽なさい。まん直しに、素敵滅法といふのをおお目にかけますから。

仁兵衛。駄目だ。駄目だ。大體、もう手前などが時代おくれなんだ。よしにしねえ、よしにしねえ。

平孝。よしませんねえ。會稽の恥辱。君の馬前に討死をしても、お連れ申しますねえ。

仁兵衛。うるせえな。どうしたつて、行きやあしねえんだから、物を言ふだけ損だ。早く歸りねえ。

平孝。歸りません。死んでも歸りません。

仁兵衛。(本當に怒つて) 歸らねえか。

平孝。(直ぐ縮み上がつて) ほんとに、旦那、いけねえんですか。

仁兵衛。駄目だと言つたら、歸らねえか。(立ち上がりさうにする)

平孝。御免、御免。歸ります、歸ります。(聲色まがひに) 殿には殊の外のお怒り。御機嫌直るそれまでは、ちつと蟄してゐるでござらう。やあ、テン、テン。(ミ、ミ、まりの悪いのを隠して、出て行く)

(間。仁兵衛、立て續けに又二三杯飲む。お花、奥から銚子の新しいのを持つて来る)

仁兵衛。寝たか。

お花。もうお休みになりました。

仁兵衛。ぢやあ、こつちはもう好いから、坊の側についてゐてやつて呉れ。

お花。はい。(奥へはひる)

(間。仁兵衛、飲み續ける)

(支配人の安藤、格千戸からはひつて来る)

仁兵衛。(直ぐ聲をかける) とうした。分かつたか。

安藤。(上がり框に腰をかけて) やつと分かりました。上野の鹽原に入らつしやいます。
仁兵衛。一人か。

安藤。お一人でございます。延公の話ぢやあ。高松さんと連絡があるやうな事を言
つてますが、どうもあたしの見たところぢやあ、そんな風は見えません。

仁兵衛。で、お前會つたのか。

安藤。おしんにですか。ええ、お目に掛かりました。

仁兵衛。おしんは、自分ぢやあどう言つてるんだ。

安藤。もう名古屋へも歸らなけりやあ、家へも歸らないと仰しやるんです。

仁次衛。で、どうしよつてんだ。

安藤。茶屋奉公をしてでも、自分の身は自分で立てると仰しやるんです。

仁兵衛。馬鹿な。そんな事が出来るもんか。

安藤。あたしもそれを申して見たんですが、何しろ一徹な方ですから、どうしても

あたしの言ふ事などはお聞き入れにならないんです。

仁兵衛。困つたなあ。で、お絹の方の行方は分かつたか。

安藤。これは直ぐ分かりました。高松さんのどこに入らつしやいました。

仁兵衛。こりやあ、別に變な事はないんだらう。

安藤。へえ。お絹さんの方は、別にどうつて事はないやうです。おしんさんの事も

大層心配して入らつしやいましてね。どうか在りかを探してくれつてさう言つて
入らつしやいました。

仁兵衛。お絹が高松さんのどこにあるやうなら、おしんと高松さんの間になんにも
ない事は確だな。

安藤。それは確でございます。

仁兵衛。(一寸考へて)おれには何が何だかちつとも分からないんだ。駒澤君が出て来たんで、おしんが家を出たなあ、まあ分かるとして、お絹までが家を出るなんて。安藤。左様です。そのわけもお絹さんに伺つて見たんですが、唯笑つて入らつしやるばかりで、なんとも仰しやらないんです。

仁兵衛。木崎君とどうかしたんぢやないか。

安藤。あたしも、先づそこいらだと思ふんですが、何しろあんな氣丈な方ですから、その位な事で、まさか家出もなさるまいと思ふんですが。

仁兵衛。ごうも分からないなあ。

安藤。全く分かりませんなあ。

仁兵衛。(洗んで) いや、何もかもおれが悪いんだ。一家の主人が、家を外にしてゐるから、こんな事になるんだ。

安藤。でも、旦那の事は、お絹さんだつて、よく承知をして入らつしやるんですか

ら。

仁兵衛。おれが意氣地がないんだ。女房に死なれて、酒を飲み歩く。飲み歩いちや

あ、又女に嫌はれる。(捨てるやうに) へ、よく出来てやがらあ。

安藤。(立ち上がり)では、もう今夜は別にもう御用はございませんか。

仁兵衛。さう、何を言ふにも、今夜の事にやあ、しようがあるまい。ごうも御苦勞だつた。

安藤。では、また明日。明朝は早く伺ひます。

仁兵衛。ぢやあ、さうしてくれ。もう上さんはすつかり好いか。

安藤。お蔭様ですつかり好くなりました。ぢやあ、お休みなさいまし。

仁兵衛。お休み。

(安藤、出て行く。間。仁兵衛、又酒を飲む)

仁兵衛。(暫くして) お花。お花。

三人と三人

「はい」さいふ壁がして、お花が出て来る

仁兵衛。今夜は早く戸をおしめ。もう誰も来ないから。さうして、早くお休み。

お花。はい。(土間へ降りて、格子戸をしめに行く)

(お花が表の戸を締め終つて、上へ上がらうとする。戸を軽く叩く音がする)

仁兵衛。また誰か来たのか。明けずに聞いて御覽。

お花。(戸の側へ寄つて) ござなでございます。(表で男の何か言ふ聲がする) 駒澤の旦那様でございますか。

仁兵衛。さうか。ぢやあ、明けてお上げ。

(お花、戸を明ける。駒澤、はひつて来る。お花、上へ上がつて、座蒲團を一つ前へ出して、奥へはひる)

仁兵衛。さあ、上がり給へ。

駒澤。失禮します。(上へ上がる)

仁兵衛。(直ぐ盃を出す) さあ、一杯ごうです。

駒澤。有難う。(盃を受けて、直ぐ飲む)

仁兵衛。(駒澤の顔を見て) ござしました。

駒澤。分かりません。

仁兵衛。おしんのゐごごですか。分かりましたよ。

駒澤。分かりましたか。

仁兵衛。分かりました。併し、もう、とても名古屋へは歸りさうもありません。

駒澤。歸りませんか。

仁兵衛。歸りませんね。

(稍長き間)

仁兵衛。君ばかりぢやない。僕もたうとう捨てられましたよ。

駒澤。あなたが。誰に。

三人と三人

仁兵衛。(或意味を含めて) きやうだい二人に。

駒澤。さう言へば、姉さんも歸らないさうですね。

仁兵衛。爲方がない。捨てられた男二人で飲みませうよ。

駒澤。男は駄目ですね。

仁兵衛。女にやあ敵ひませんよ。

駒澤。爲方がありません。飲みませう。(自分の前にある盃へ、自分で酒を注いで飲む)

仁兵衛。(立つて、湯呑を一つ持つて来る) 酒のこつてす。酒のこつてす。(湯呑へ自分で酒を

注ぎ、一息に一杯飲んで、それを駒澤にさす)

駒澤。これですか。

仁兵衛。驚く事はないでせう。

駒澤。飲みます。(仁兵衛に酌をして貰ふ)

仁兵衛。煙草一服といふ事があります。まあ、酒を飲んで、世の中を考へ直すんで

すね。

駒澤。もう、どうしても諦めなきやならないでせうか。

仁兵衛。お諦めなさい。お諦めなさい。あつしも、もう女の事は諦めました。

駒澤。飲みませう、大に飲みませう。

仁兵衛。さうだ、さうだ。さう來なくちや、男ぢやない。

(二人で湯呑をやりとりして飲む。間。木崎がぼんやり、はひつて来る)

仁兵衛。(それに目をつけて) ええ、びつくりした。木崎君ぢやないか。

木崎。ええ。(と言ひながら、上へ上がる)

仁兵衛。木崎君。(駒澤を指して) これはおしんの亭主の駒澤さんだ。ぢやあない。お

しんの元の亭主の駒澤さん。

木崎。(駒澤に) お名前は承つてゐます、僕は木崎です。

駒澤。僕もお名前はお絹さんから承つてゐます。

仁兵衛。どうした。木崎君。珍しいぢやないか。

木崎。御無沙汰をして濟みません。

仁兵衛。(湯呑を出す) まあ、一杯やり給へ。

木崎。僕は、酒は。

仁兵衛。まあ、おつきあひにやるさ。君も男の一人だ。

木崎。男は男ですが、極めて意氣地のない男です。

仁兵衛。そりやあ僕達だつて同じ事だ。今も二人でそれを言つてゐたのだ。女に捨てられた男二人だ。

木崎。僕も捨てられました。

仁兵衛。誰に。誰に捨てられた。

木崎。それは言へません。

仁兵衛。お絹にかい。(高く笑ふ)

木崎。さうぢやありません。

仁兵衛。何しろ、それは面白い。捨てられた男が三人集まつたんだ。飲み給へ、飲み給へ。

木崎。飲みませうか。(湯呑に手をかける)

駒澤。(笑つて) お飲みなさい。

仁兵衛。は、は、面白い、面白い。

駒澤。(木崎に) あなたなどは、いづれ未婚の婦人に捨てられたんだらうが、僕などは自分の女房に捨てられたんだからひどいや。

仁兵衛。僕はきやうだいに捨てられたんだ。きやうだい二人によ。

木崎。僕だつて。(と言ひかけて、湯呑からぐつと酒を飲む)

仁兵衛。いよう、その意氣、その意氣。

駒澤。これから、みんなで仲よくして、男の國を作りませうよ。

仁兵衛。さうだ。さうだ。男の國。男の國。男ならでは夜の明けぬ國さ。(唄ふやうに) 男なら——では。と來たね。

木崎。賛成ですね。さうして、世界の女を、みんな征服してやりませう。駒澤。さうだ。さうだ。征服だ。勝利だ。

仁兵衛。男の國ばんざあい、か。

木崎。は、痛快。痛快。

(突然、明けつ放しになつてゐる格士戸から、お絹がはひつて來る。これも酒に酔つてゐる)

お絹。(木崎に目をつけるこ、いきなり上へ上がつて、木崎の肩を掴む) やい。又やつて來やがつたな。お前さんだらう。おしんちゃんをおびき出したなあ。

木崎。知りませんよ。僕は知りませんよ。

お絹。駄目だ。ちやんと、けふ鹽原へ行つて、調べて來たんだ。

木崎。そりやあ、行つた事は行きましたけれど、直ぐ追ひ出されつちまつたんです。

お絹。何を言つてるんだい。さあ、歸れ。ひとの家をめちやめちやにしやあがつて。
(手を掴んで、土間へ引きずりおろす) さあ、歸れ、歸らないか。(木崎の顔を平手でめちやめちやに打つ)

木崎。御免なさい、御免なさい。

(お絹、木崎を踏んだり蹴つたりする。仁兵衛と駒澤、一度に酒がさめ、様子で 呆然としてゐる、奥で仁太郎が泣き出す。お絹、なほ烈しく木崎を打つ)

幕

捨

兒

(二幕)

丁巳去月...
...

人物

龜井留吉。酒店の主人。

およし。その妻。

松吉。その弟。

二郎。小僧。

新吉。小僧。

近藤寛。大學生。

白井數馬。巡查。

拾 兒

酒を立飲に来る男二人。
町を通る人。

場所

東京の或學生町。

時代

現代。

舞臺。食料品荒物などを兼業する或酒屋の店先。及びその前の道路。

十二月の或晩、十時頃から十一時頃までの出来事。

主人留吉、小僧二人(二郎と新吉)を相手に帳合をしてゐる。

二郎。……十九日が十銭でたわし。二十日が一圓十銭で牛罐。廿一日が五十銭でシ
ロップ。廿二日が拾一銭で上酒。廿三日が五銭で酢。同じく十五銭で草帚。廿四
日が二圓十銭で味の素。廿五日が三十三銭で日本橋漬——それで、山口さんはお
しまひです。

主人。よし。間違ひなした。へは。

二郎。二十三圓と三十八銭。

主人。よし。よし。

時計、十時を打つ。

主人。十時か。もう一息だ。やつてしまはう。あと二軒だらう。今度は高山さんか。
新吉。へい、高山さんです。高山さんはお酒ばかりだから、わけなした。

二郎。隣り合つてゐても妙なもんだね。山口さんは一切お酒の御用なし、高山さん
は年中お酒の御用ばかりといふのだからな。

主人。(取り合はずに) さあ、讀んだ。讀んだ。あすこは新吉だらう。

新吉。へい。では願ひまして、お朔日が三圓五十錢で 升。二日が 圓八十錢で五合。三日が一圓八十錢で同じく。四日が 圓八十錢で同じく……(讀み續ける)

電話の鈴鳴る。

小僧二郎、出る。

二郎。はあ、はあ……上州屋でございます……はあ。ごなた様で、あわ、荒木さんで入らつしやいますか……へい、へい……富久娘を一升……へい、へい……荒木さんでございますね……明朝八時まで……へい、へい、へい、畏りました。ごうも有難うございます。左様なら。(電話を離れる。主人に) 旦那、荒木さんで、あしたの朝八時に、富久娘を一升ですつて。

主人。(帳面から目を放さず) よし、お前覺えて置け。忘れるな。

二郎。へい。

新吉。(讀むのをやめて二郎に) なんだつて朝つばらから酒が入るんだらう。

二郎。きつと子供が生れるんだよ。奥さん、随分大きなお腹をしてゐたからな。

新吉。子供が生れたつて、朝つばらから酒を飲む奴があるものか。

二郎。ぢや、産湯にでも使ふんだらう。

主人。(帳面から顔を上げて) 馬鹿。新吉、あとを讀まないか。

新吉。へえ。ええと、十四日まで濟みましたね。ええと、十五日が三圓五十錢で一升。十六日が一圓八十錢で五合。十七日が一圓八十錢で同じく。十八日が一圓八十錢で同じく。も一つ、十九日が一圓八十錢で同じく……(讀み續ける)

労働者風の男、立飲に来る。

小僧二郎、直ぐ一ぱいコップについて出す。鹽を少し皿にのせて持つて来る。

労働者、黙つて一杯一息に飲み干す。コップを出す。二郎、又樽の栓を抜いて、注ぐ。

労働者、今度は問を置いて飲む。初め鹽を掴む。やがて、腹掛から、小さな竹の皮包を出し、その中

から何か揃んで食ふ。

主人。(新吉に) べはいくらになつてる。

新吉。丁度五十六圓になつてゐます。

労働者。一寸主人の方を見る。併し、直ぐ又酒の方にかかる。

主人。二郎に) 二郎、今度は大井さんだぞ。

二郎。へえ。(主人の側へ行く)

労働者。二杯目を飲み終り、又コップを出す。今度は新吉が酒をついで出す。

労働者。ちびりちびり飲む。

二郎。(この間に、もう讀んでゐる) 朔日が二十錢で味噌。二日が十錢 味噌。三日が十

五錢で味噌。四日が十錢でマッチ。五日が六錢で磨き粉。六日が二十一錢で味噌。

七日が五錢で鹽……(讀み續ける)

紋附の羽織を着た男が、店へはひつて来る。

新吉。入らつしやい。

紋附。酒を。

新吉。お酒は何を差し上げます。

紋附。ここで飲むのだ。

新吉。(驚かずに) へえ。(直ぐコップへ一杯ついで出す)

紋附の男。ちびりちびり飲み始める。そこに出てゐる鹽を嘗める。

労働者。竹の皮包を紋附の男の方へ出す。

紋附。(糊の顔を見て) いや、これは。僕にですか。それは恐縮。頂きやす。

労働者。寒いね。

紋附。東京の寒さぢやござせん。満洲の寒さでやす。

労働者。お前満洲へ行つてた事があるのか。

紋附。左様。三年をりやした。

労働者。どこにゐた。

紋附。大連にもゐやした。旅順にもゐやした。奉天にもゐやした。

労働者。商賣は何だね。

紋附。興行をしてゐやした。

労働者。鑛山か。

紋附。いや興行物で。

労働者。ああ。芝居の興行師か。

紋附。芝居もやりやしたし、手品もやりやしたし、オペラもやりやした。

労働者。儲けたな。

紋附。一時はあなた、馬車を乗り廻すやうな景氣でやしたが、明智光秀三日天下で、忽ち没落でやさあ。

労働者。今は何をしてゐる。

綾附。ごつかに何か働くところはないでやせうか。

労働者。ねえな。

紋附。旦那は何をしてゐなさるので。

労働者。おれか。おれは労働運動よ。

紋附。儲かりやすか。

労働者。儲からねえな。その代り、ごう轉んでも食ひはぐれはねえ。

紋附。成程な。

労働者。だが、この頃はごこでも酒を禁じちまつたんで、そいつだけが不自由だ。

その代り、運動はしつかりして來た。容易に資本家に負けやしねえ。

紋附。全く資本家といふ奴は癩に障りやすな。

労働者。お前だつて、興業師なら、資本家だ。

紋附。もうそれは廢業でやす。

労働者。資本家の自由廢業か。笑はせやがる。

紋附。(怒りもせず、笑つてゐる) へ、えへえ。

主人の弟、出て来る。

店に客のゐるのを見て、また元来た方へはひる。

主人。(二郎に) べ高は。

二郎。十一圓と二十三錢五厘。かどの多い割に少なえなあ。

新吉。あすこは婆さんがしつかりしてゐるから、經濟がうまいや。

主人。無駄を言はずに、帳面を片づける。

二人、帳面を片づける。

主人も帳場を片づけにかかる。

労働者。何か。君は演説が出来るか。

紋附。演説て程の事は出来やせんが、口上なら巧いもんでやす。

労働者。どうでえ。一つおれの方の會へ来て働いちやあ。

紋附。結構でやすな。會はごちらにあるんで。

労働者。小名木川だ。愛勞會つてんだ。お前ひとりものか。

紋附。女房も子もありやしたが——滿洲へ置いてきぼりにして來やした。

労働者。當り前だ。どうも食へなきやあ、しやうがねえからな。おれなんぞは、

問が利口だから、初めつから女房なんぞ持ちやしねえ。

紋附。全くだ。人間至るところ青山ありでやすからなあ。

労働者。何でえ、そりやあ。

紋附。女が欲しけりや、コツへ行けでやす。

労働者。お前、割に話せるな。そのイキで一つ遣つて呉れ。

紋附。やりやせう。

労働者。ぢやあ、これから直ぐ来るか。

紋附。参りやすとも。

労働者。お前、家はごこなんだ。

紋附。家なんぞありやしません。

労働者。ぢやあ、合宿へ泊りねえ。ところで、お前もう一杯やらねえか。

紋附。御馳走になるんでやすか。

労働者。しみつたれた事を言ふねえ。(紋附の男のコップをさつて、二郎のゐる方へ差し出す)

二郎、そのコップに酒を注いで来る。

紋附。いや、濟みやせん。有難う。

労働者。よせやい。一つ健康を祝して、今夜は板橋とするかな。あしたは又命がけだからな。

紋附。そんな危険な事があるんでやすか。

労働者。なあに、お前は口の方だから大丈夫だ。おれは腕で行く方だからな。さあ

行かうぜ。(二郎に) 小僧さん。いくらだ。

二郎。一緒ですか。

労働者。さうだ。

二郎。(新吉と相談してから) ええ、一圓と十五錢。

労働者。(腹掛から錢を一摘み出して、その中から要求されただけの額を置くと、残りを又腹掛の中へ入れて、とんとん出かける)

紋附。ごうも、濟みやせんな。(あまを追ふ)

主人。暢氣な人達だ。さあ、早く戸をしめろ。

二郎と新吉。へえ、へえ。

主人。あしたの朝、荒木さんの富久娘を忘れるなよ。

二郎。へえ、大丈夫です。

丁度そこへ、主人の弟、はひつて来る。ふさころに、赤子を入れてゐる。

弟。今晚は。

二郎。入らつしやい。(主人に)旦那、本所の旦那が來ましたよ。

主人。(黙つて、何か片づけてゐる)

新吉。本所の旦那が入らつしやいましたよ。

主人。(一寸弟の方を振り向くが、又よそを向いて、片づけものをする)

弟。兄さん。今晚は。

主人。(突然、弟の方を向く)何か用か。

弟。ええ。少し願ひがあつて。

主人。お前のお願ひは聞かないでも分かつてる。もう店をしまふのだ。出直して來い。

弟。でも……折角遠いところを來たんですから。

主人。それはお前の勝手だ。

弟。ごうも、兄さんのやうに言はれてしまつては。

二郎と新吉、奥へはひる。

主人。(赤子に目をつける)お前、赤んぼを抱いてるな。

弟。ええ。一週間ほど前に生れたんです。それで、實は……

主人。祝へと言ふのか。

弟。ごう致しまして。今の身分で、決してそんな大それた事は願やしません、唯
かかあが産後の肥立が悪くて……

主人。(黙つてゐる)

弟。全く、ごうも、十月にあんな事があつたんだし、二度と來られた義理ぢやない
んですが、ほかに頼るところはないし、この頃ぢや職の方もからつきし……

主人。當り前だ。はやらないのが當り前だ。第一、おれはお前の職が氣に入らない
のだ。そこの(指さす)活版所へ行つて見る。大きな器械が夜も寝ずに廻つてゐて

日に何萬といふ本が刷れるんだ。製本も、器械でどんどん出来るといふぢやないか。選りに選つて、今どき、日本紙のかがり綴などを職にする奴があるものか。弟。でも、この頃の本は直ぐ毀れてしまひます。

主人。読んでしまへば毀れたつてはごれたつて構ふものか。

弟。ところが、さうでないんです。後世へ傳へるやうな立派な著述は、成るべく日本紙に刷つて、しつかり綴ちて置きたいんです。

主人。ふむ。また受賣だな。あの「探古」とかいふ先生の。おれは第一、お前があいふ時代おくれな人間を貴んでるのが氣に入らないんだ。やれ「酒樽の由來」だの、「吉原の沿革」だのつて、役にも立たない穿鑿をして喜んでるんぢやないか。今どき、そんな物を読む閑人があるものか。先生がそれだもの、弟子のお前が貧乏するのは當り前だ。

弟。ええ。あたしはごうせかういふ意氣地なしですから、何と言はれても構ひませ

んが、ごうか先生の事だけは悪く言はないで下さい。先生は日本の學問の爲に、金も名も忘れて、食べる物もろくろく食べずに、一生懸命に働いて入らつしやるんですから。

主人。入らつしやる。何が入らつしやるだ。よく聞けよ、松吉。好いか。働くといふのはな。おれ達のやうに、朝は五時に起きて、夜寝るのは大抵十二時。その間飯もおちおち食はずに、動き通しに動いてゐる——これが「働く」といふのだ。

弟。兄さんの事を働かないとは言ひません。唯、先生は兄さんなどのしてゐる事より、もつと高尚な爲事をして入らつしやるんです。日本に何人といふ人にしきや出来ない爲事をして入らつしやるんです。

主人。ふん。そんなに偉い人なら、おれのところへなんか頼つて來ないで、その人のところへ行つたら好いぢやないか。

弟。でも、かういふ事で、先生に御迷惑をかける事は出来ません。

主人。頼る事の出来ない人間なら、いくら偉くたつて、しやうがないぢやないか。人間は人に頼られるやうにならなきや駄目です。

弟。兄さんはお金の事ばかり考へてるんです。

主人。さうだ。金の事ばかり考へてる。だから、お前のやうな怠け者にはピタ一文だつて恵む事は出来ない。

弟。ああ、さうですか、分かりました。ぢやあ、もうなんにも言はずに歸ります。ええ。左様なら。

主人。おい、おい、二郎。早く戸をしめてしまへ。

二郎。(出て来る) へい。(そこらを片づける)

新吉と一緒に主人の妻およしが出て来る。

妻。どうしたんです。

主人。なあに、又松吉の奴がやつて來やがつたんだ。

妻。で、もう歸つたんですか。

主人。追ひ返してやつた。あいつも今度といふ今度は目が覺めるだらう。なあに、

ここで働かして呉れと言ひさへすりやあ、何でもないんだ。それがあいつには言へないんだ。やつぱり、あいつは親父の血が勝つてるんだ。

妻。でも、あなたにはたつた一人の弟さんですからねえ。暮れで困るんでせう。なんとかしてお遣りなされば好かつたのに。

主人。子供が生れたんだとよ。

妻。まあ、ぢやあ、尙更の事ですわ。可愛い子でせうねえ。お峰さんは美人だから。

主人。怠け者の子だ。どうせ碌な者になりやしないよ。

弟、又出て来る。

弟、兄さん。

主人。(知らん顔をしてゐる)

弟。兄さん。

妻。あなた、松さんですよ。

弟。姉さん、ごうも、こんなにおそく上がつて、濟みません。

妻。ごう致しまして。

弟。兄さん。今のはあたしが悪うございました。今言つた事はみんな取り消します。

あたしは、やつぱり兄さんを頼るより外に爲方はありません。子供が可哀さうです。嬢が可哀さうです。

主人。(黙つて戸を締めにかかる)

弟。ねえ、兄さん。

妻。(主人に)ねえ、あなた。松さんがあんなに言つてるんですから。

主人。駄目だ。歸れ。歸れ。

妻。(赤子に目をつける)まあ、赤ちやんを連れて來たんですね。どれ、どれ、一寸見せ

て下さい。(側へ寄る)まあ、まあ、おとなしく寝ん寝だこと。

弟。へえ。仕合せと、世話のちつとも焼けない子でして。

妻。男。女。

弟。男で。

妻。それはまあ、お峰さん、大喜びでせうね。

弟。それが……まだ、子供の顔もろくろく見ないんで。

妻。あどでも悪いんですか。

弟。ええ。へえ。

主人。さあ、さあ。いつまで同じ事を言つてるんだ。早く歸れ。早く歸れ。

弟。でも、兄さん、あたしは、ごうしても、今夜は、この儘は歸れません。

主人。ぢやあ、ごうしようと言ふのだ。

弟。もう、一圓でも、二圓でもよござんすから、貸して下さい。

主人。いけない。

妻。あなた、その位なら、ごうかして。

主人。お前は黙つてゐなさい。弟に「さあ、歸らないか。」

弟。ぢやあ、せめて、子供だけでも引きとつて。

妻。あなた、さうして上げようぢやありませんか。

主人。駄目だ。駄目だ。歸れ。歸れ。

弟。ぢやあ、子供を、ここへ捨てて行きますよ。

主人。まだ歸らないな。どうしても歸らなけりや、手荒な事をするぞ。

弟。ええ、ごうされても、あたしはごきません。

主人。歸らないか。(突く、赤子、泣き出す)

妻。まあ、あなた、そんな亂暴な事を。

主人。お前は黙つてゐろ。(弟を外へ突き出す) さあ、歸れ。歸らないか。

弟。いいえ、歸りません。

主人と弟、揉み合ふ。

弟、終に締め出される。(戸を締める時は、小僧達も手傳ふ)

弟、暫く締め切られた雨戸を睨んで立つ。やがて、泣く子をすかしながら、行きかける。が、直ぐ戻つて来て、赤子を軒先へ捨てる。一度行きかけて、又戻り、自分の羽織を脱いで着せたり、自分の襟巻をさつて、子供の頭を包んでやつたりする。暫く佇んで、子供の様子を見てゐる。やがて、顔を押しさへて、足早に去る。

一度黙つた赤子が、又泣き出す。

雨戸の中で十一時が鳴る。

主人の妻、小窓をそつと明けて、顔を出す。

妻。まあ、ほんとに捨てて行つてしまひましたよ。

主人。(妻の後から少し顔を出して) うつちやつとけ。うつちやつとけ。あいつは氣の小さい奴だから、近所にて様子を見てゐるに違ひない。今に歸つて来るにきまつ

てる。(小窓を締める)

人の往來、絶える。

赤子、泣く。

雪が少し降つて来る。

稍長き間。

口笛でファウストの行進曲を吹いて来るのが聞こえる。

やがて、マントを着た大學生が一人出て来る。店の前を勢よく通つて行つてしまふ。

赤子、烈しく泣く。

學生、うろろしながら、歸つて来る。子供を見つける。あたりを見廻す。赤子、泣く。學生、思はず抱き上げる。が、又下へおろす。又抱き上げる。又考へて 下へおろして、行きかける。又赤子、泣く。又抱き上げて、少し行きかけるが、又立ち止つて、考へて、元のところへ置きに歸る。赤子を下へおろして、襟卷の崩れたのを直してやつたりなさずする。

丁度、その少し前から密行の巡査が出て来て、ちつき立つて見てゐる。

學生、行きかける。

巡査。君。君。

學生。は。

巡査。(赤子を指さす) それは。

學生。子供です。

巡査。君の子供ですか。

學生。僕の。(笑つて) 僕は學生です。

巡査。學生だつて、子供がないにきまつてはゐません。

學生。それは、僕の同級生にだつて、持つてる奴はあります。

巡査。だがら聞くのです。それは君の子ですか。

學生。僕の子ではありません。

巡査。では、なせ今抱いてゐたのです。

學生。自分の子でなければ、抱いては悪いのですか。

巡查。理屈を言つちやいけません。では、卒直に訊きませう。あなたは自分の子を捨てたのではありませんか。

學生。いいえ、さうぢやありません。

巡查。さうでないといふ證據がありますか。

學生。證據。

巡查。證據と言つては無理かも知れませんが、私に承認の出来るやうな事が、何かありますか。

學生。では、順序だけ申し上げませう。僕は親類の家へ遊びに行つた歸りに、唯ここを通りかかつたのです。僕はその下宿にゐるもんですから。ところが、子供の泣き聲がするから、戻つて見ると、ごうも捨兒らしいんです。あんまり泣くから、可哀さうになつて、抱き上げては見たんですが、下宿へ連れて歸つても、僕

にはどうする事も出来ません。で、また、元のところへ置いたのです。唯、それだけです。

巡查。併し、近頃は、大分學生間に戀愛問題がありますからな。

學生。それは、あるかも知れませんが。また僕自身にも、あるかも知れません。併し

これとそれとは別問題です。

巡查。(手帳を出す) 君の名は。

學生。僕は悪い事をしたのでせうか。

巡查。それは分かりません。私は唯自分の職責として、君の名を訊くのです。

學生。では、あなたの名をお言ひなさい。

巡查。私の名こそ言ふ必要はないのです。併し、私は自分一個の主義として、訊かれれば言ふ事にしてゐます。私はその派出所にゐる白井數馬といふ者です。

學生。僕は、近藤寛ゆたか。

巡查。ユタカは。

學生。寛です。寛大の寛です。

巡查。帝大ですね。

學生。文科の三年です。

巡查。下宿は。

學生。元町二丁目廿三番地。長生館。

巡查。ちやうせい。

學生。長く生きるです。

巡查。國は。

學生。京都市七條下ル西洞院。

巡查。年は。

學生。そんなに何もかも訊くのですか。

巡查。一應訊いて置きます。

學生。二十三です。

巡查。(子供を抱き上げる。子供泣きやんでゐる)では、お氣の毒ですが、一寸暑まで御同行を願ひます。

學生。警察へ行くのですか。

巡查。さうです。

學生。それは迷惑ですな。

巡查。迷惑かも知れませんが、やむを得ません。

學生。警察へ行くのは餘り愉快ではありませんな。

巡查。爲方がありません。この子が君の子だか、さうでないか、確めなければなりませんから。

學生。それは、さつきからさうでないと言つてるではありませんか。

巡查。それだけでは、私として承認が出来ないのです。

學生。なぜ承認が出来ないのですか。

巡查。それは署へ行つて言ひませう。

學生。なぜ。ここでは言へないのですか。

巡查。また理窟ですね。それでは言ひませう。先づ第一に斷つて置きたいのは、私が巡查であるといふ事です。

學生。それは分かつてゐます。

巡查。私は巡查です。それをしつかり頭に置いて下さい。その巡查の私が、この目で見たいものは何でしたか。この子を抱いてゐた君が、この子をここへ捨てた事です。私の見たのは、唯それだけです。私は巡查として、君を疑はなければなりません。疑はなければ、私の職務が立ちません。想像や推測で、人を罰したり許したりする事は、吾々に許されてゐません。

學生。あなたの職務は人民を保護する事です。

巡查。さうです。人民の保護です。私はこの子が可哀さうだから、君を疑ふのです。

若し、これが君の子であるとして、君がこの子を捨てなければならぬとしたらその事情も訊きたいのです。それは君を保護する事になるのです。

學生。僕は自分の子を捨てるやうな事はしません。

巡查。さうかも知れませんが、私の見たのは、君が捨てるところを見たのです。

學生。捨兒が泣いてゐれば、可哀さうになるのが當り前ではありませんか。誰だつて捨つてやるのが本當です。それが人間といふものです。あなただつて捨つてせう。

巡查。勿論、拾ひます。

學生。それで、あなたに嫌疑がかかったらどうします。

巡查。警察へでも何處へでも行つて、明かりを立てます。

學生。若し僕が、拾つた儘、ごんごん行つてしまつたら、どうですか。
巡査。それなら、咎めなかつたかも知れません。

學生。それは不合理ぢやありませんか。

巡査。精神的に言へば不合理かも知れません。併し、吾々は目で見た事のみに根據を置きます。

學生。では、僕が一旦拾つたものを、又捨てたのが悪いのですね。

巡査。拾つたところは、私は見ないので。

學生。(長き間) さうだ。確にそれは悪い事だ。僕は愛が足りなかつたのだ。僕の躊躇は愛の缺如から來たのだ。ごんな事があつても、拾つて行くべきだつたのだ。さうだ。やつぱり、あなたはえらいところを見つけた。僕は悪かつた。僕は罰せられても爲方がない。ああ、恐ろしい。僕は恐ろしい罪を犯したのだ。

巡査。同行しますか。

學生。致します。

巡査。では。

二人、去る。

雪、ますます降る。

寢巻姿の主人の妻、小窓を明ける。

妻。あなた、あなた、子供がゐませんよ。

主人。(後から) 松吉が又來て、連れて歸つたんだらう。

妻。何だかごごと人聲がしましたね。

主人。お廻りにでも咎められてゐたんだらう。

妻。さうですかねえ。可哀さうに。

主人。あした、ごうにかしてやらうよ。

妻。ごうかねえ。

主人。子供の始末さへつきやあ安心だ。さあ、寝よう。寝よう。

二人、顔を引つ込める。小窓の戸が締まる。

雪がますます烈しく降る。

松吉、ふるへながら、出て来る。軒下を見ると、子供がゐないので、一寸驚くが、直ぐ又何か考へつ
いたやうに、酒屋の店の兩戸の側へ身を寄せて、耳を傾ける。

弟。坊や、よく寝てるに見えるな。

安心したやうに、行つてしまふ。雪が無關心に降りしきる。

—幕

息

子

(一幕)

第一の教師

第二の教師

學生 A

學生 B

その他の學生

小使

現代

某大學の文科の教室。

正面奥に教壇——机、椅子、黑板。その左右に硝子窓。窓の外に新緑。初夏の日光。

許 嫁

11111

右手に大きな戸口。

教壇に並行して、學生用の机とベンチ、三列にならぶ。

第一の教師、教壇に立つて講義をしてゐる。二十人程の學生、不規律に、ベンチのそこそこ腰にかけてゐる——まるで明いてゐるベンチがある。さうかと思ふと、一つベンチに目白押しに大勢腰かけてゐる。

學生の多數は筆記をしてゐるが、中には筆記をせずに、唯ぼんやり教師の顔を見てゐるのがある。また、講義とは關係のなささうな書物を読んでゐるのがある。居眠りをしてゐるのがある。講義を聞かずに隣同志で話してゐるのがある。

學生Aと學生Bは、一番うしろのベンチ——見物席に一番近いベンチ——に列んで腰をかけてゐる。Bは筆記してゐる。Aは机の上に兩肘をついて、手の上に顎をのせてゐる。

第一の教師。(鐵縁のロイド眼鏡をかけ、頭を一分刈にした、肩幅の廣い、丈の低い、三十一二の男である。極めて早口に、全く感情なしにしゃべる)……ええ、次ぎは變態恐怖の話であります。一體この變態恐怖なるものは、その強度なること、抑制の不可能なること、不合理な

ることなどが、その特色であります。ボリス・シヂスに依ると、一體恐怖なるものは、あらゆる精神病的疾患の基礎をなすものであります。そこで、先づ分類から先きにいたすことにしますが、先づ第一が一般恐怖で——これを Panophobia と申します。(黑板へ白墨で術語を書く) 即ち、何等特別なる事物について恐れるのはありません。無意味に狐疑憂慮する状態です。フロイドに依ると、あらゆるフオビア——これは後で言ふ特殊恐怖のことですが——あらゆるフオビアは、先づパノフオビアとして始まるので、それが特別なる事物に關係して來るのは、第二階梯であるのです。フロイドは更にかう説いてゐます。このパノフオビアなるものは、恐怖の表現ではなくて、實は性的禁遏即ち Sexual Prohibition の表現だと言ふのです。さて、第二が特殊恐怖、即ち今申した Phobia でありまして、(黑板に書く)これは或特別な事物に依つて起される誇張せられた恐怖を言ふのであります。元來、恐怖は行爲の偉大な抑止者でありますから、フオビアは特殊な抑止者

だと言ふことが出来ます。ここで、プリンスの説を一寸述べたいのでありますがそれはあとにいたします。そこで、この特殊恐怖なるものは、凡そ十八種に分かれてをります。AがAcrophobiaで、(黑板に書く)これは高いところを恐れるのであります。BがAgoraphobiaで、(黑板に書く)これは広いところを恐れるのであります。CがAlgophobiaで、(黑板に書く)これは苦痛を恐れるのであります。DがAnthropophobiaで、(黑板に書く)これは男或は特別な男を恐れるのであります。EがAstraphobiaで(黑板に書く)これは雷、或は他の氣象的現象を恐れるのであります。FがClaustrophobiaで、(黑板に書く)これは狭い場所を恐れるのです。Bのアゴラフォビアの丁度反対なのです。GがGynophobiaで、(黑板に書く)これは女或は特別な女を恐れるのであります。HがHematophobiaで、(黑板に書く)これは血を恐れるのであります。IがMisophobiaで、(黑板に書く)これは汚れを恐れるのであります。JがPhobophobiaで、(黑板に書く)これは恐怖の恐怖であります。

即ち、恐怖を恐怖するのであります……(終業の鐘鳴る)ええと、まだ大分あるのですが、食事時間ですから、これでやめます。(ハンケチで手を拭きながら)プリンスの説も來週紹介します。(参考書籍とノートを風呂敷にくるんで、教壇を降り、右手の戸口から出て行く)

學生達、ばらばらに立つ。煙草に火をつけながら出て行くのがある。欠伸をしながら出て行くのがある。ノオトで机を一つ一つ叩きながら出て行くのがある。がやがやざわざわしながら、やがて、みんな出て行ってしまふ。

學生Aと學生Bだけ残る。

B立ち上がる。A、ちつと腰をかけた儘で、黑板の方を向いてゐる。

B。飯を食ひに行かうぢやないか。

A。(向うを向いた儘)うむ。

B。集會所はまづいから、けふは外へ出て、ミネルワで食はうよ。變態恐怖で頭

が變てこになつてしまつた……

A。うむ。

B。午からは市岡だらう。あの先生、掛持だから、どうせ遅いよ。ゆつくり食つて來られるよ。

A。(黙つてゐる)

B。どうしたんだ。氣持でも悪いのか。

A。(半分見物席の方を向く。突然 おれは煩悶してるんだ。

B。煩悶。冗談ぢやない。(間) 何を煩悶してるんだ。

A。(黙つてゐる)

B。(Aと向ひ合つて、他のベンチの端に腰をかける。二人が机と机の間の道を挟む) 君も今の講義で、頭が變になつたんぢやないか。

A。違ふ。さうぢやない。

B。ぢや、どうしたんだ。

A。もう、こなひだから煩悶してるんだ。

B。どうしたんだ。金の問題か。

A。ううむ。さうぢやない。

B。女か。

A。(黙つてゐる)

B。(笑つて) 女だな。

A。(突然) 君の妹は今幽へ歸つてゐるんだね。

B。ああ、歸つてるよ。少し頭が悪いもんだから。それがどうかしたのかい。

A。僕の煩悶はね。

B。うむ。

A。僕の煩悶は君から起つてることなんだ。

B。僕から。

A。ああ。だから、どうしても君に話さなけりやならないんだ。

B。ぢやあ、話したら好いちやないか。

A。他の人に話したつて、なんにもならない煩悶なんだ。

B。だから、聞かうと言つてるぢやないか。

(間)

A。君の妹な。

B。うむ

A。あれはほんとに君の妹なのか。

B。變なことを訊くな。當り前ぢやないか。

A。ほんとに君の妹なんだね。

B。さうだよ。

A。ぢやあ、訊くがね。若し君の妹に或リイェスハンデル(變愛事件)が起つたとし

たら、君は兄貴としてどういふ處置をとるね。

B。リイェスハンデル。(笑ふ)そんなものが起る筈はない。

A。なせ起る筈がないのだ。

B。それは……(間)僕は妹の人格を信じてゐるからだ。

(長き間)

B。(不安らしく)だが、若しそんなことでもあるのか……

A。(黙つてゐる)

B。確實な證據でもあるのか。

A。ある。

B。相手は何者だ。

A。(直ぐ)僕だ。

B。君だ。

A。ああ。

B。(怒る)そ、それは怪しからん。かりにも人の妹を……君はごうして……君はごうして償ひをつけるつもりだ。

A。償ひ。(冷笑する)君は妹を束縛するのか。(間)戀愛は自由ぢやないか。

B。束縛するんぢやない……併し、そんな不眞面目な……

A。眞面目か不眞面目か研究して見たか。

B。研究はして見ないが、大抵分かつてゐる。この頃の戀愛は大抵さうだ。

A。(いきなり)嘘つき。

B。何が嘘つきだ。

A。富子さんは君の妹ぢやない。あれは君の言ひなづけだ。

B。(驚いて)誰がそんなことを言つた。

A。富子さんが自分で言つた。

B。富子が自分で……

A。(遮るやうに)君も嘘つきなら、富子さんも嘘つきだ。

B。富子は自分で告白したと言つてるぢやないか。

A。初めに告白すりやあ好いんだ。あとで告白したんだ。

B。あとで。(間)あとでとは何のあとでだ。

A。それを今言ふ必要はない。富子さんはどこまでも君の妹として僕に近づいて来たんだ。僕だつて、それを初めに知つてりやあ、別に執るべき態度があつたんだ。それを——それを——あとになつて言ふなんて。(間)あいつは淫婦だ。

B。それは誰に向つて言ふ詞だ。

A。誰にでも向つて言ふ詞だ。ほんとに君を愛してるなら、初めに總てを告白し

なけりやならない筈だ。

B。僕等の愛について、君の干渉を受ける必要はない。

A。干渉はしないさ。唯事實を述べてるんだ。富子さんは君に對しても愛がなければ——僕に對しても愛がないんだ。

B。君に對しても愛がないと言ふのか。

A。ない。確にない。あの嘘つきが何よりの證據だ。初めに言へば好いことを、あとで言つて僕を苦しめる——それだけでも、あの人には愛がないのだ。

B。(一寸考へて)さうすると、君のシチュエーションは餘程悪くなつて來るぞ。(間)
愛が君へ移つたなら、まだ考へやうもあるだらうが、愛がなくて、唯肉だけの問題だとすると、いよいよ僕は許せなくなる。

A。それは富子さんに向つて言はるべき詞だ。僕は少しも欺いてはゐなかつた。僕には愛があつた。實は二年も前から思ひ詰めてゐたのだ。

B。今はごうだ。

A。もうない。あの嘘が分かつてから、一度に厭になつてしまつた。

B。過去は問題の外へ置かう——問題の解決は現在の状態から出發しなけりや駄目だ。(間)すると、今君はもう愛はないのだね。

A。ない。

B。富子の方にも愛はないと言ふのだね。

A。確にない。

B。そして、富子は僕に對しても愛を持つてゐないと主張するのだね。

A。ああ、主張する。

B。實は、僕も君の話聞いて、あいつに愛が持てなくなつた。

A。さうなるのが當り前だ。

B。すると、君と僕の間に横たはつてゐる富子は、唯肉としての富子なんだね。

- A。さうだ。
- B。さうすると、氣の毒だが、僕の勝利だ。
- A。(冷笑して)なせ。
- B。僕に優先権があるからだ。
- A。どんな優先権があるのだ。
- B。僕の方が先きだと言ふのだ。
- A。何が先きだと言ふのだ。
- B。僕は両親に對する約束を破つて、とうから富子と夫婦になつてゐた。
- A。(冷笑して)それだけか。
- B。それだけかとは。
- A。それだけなら、僕はもう君を追ひ越してゐる。
- B。追ひ越してゐるとは。

A。富子さんは妊娠してゐるのだ。

B。妊娠。

A。うむ。

B。(笑ふ)そんなばかなことがあるものか。

A。ところが、あるんだ。頭が悪いと言つて、國へ歸つたのは、その言ひわけに過ぎないのだ。

(長き間)

B。だが……若しさうだとしても、それがごつちの結果だか分かるものか。

A。ところが、それがはつきり分かつてゐるのだ。(內衣兜から手紙を一通出す)これを見給へ。

B。(手紙を読む。讀んでゐる内に、顔色が變つて来る。無言)

A。僕と富子さんの關係は三月五日から始まつた。醫者の證言もある。その手

紙に書いてあることは本當だ。(問) さすがの嘘つきも、困る時は本當のことを言ふのだ。

B。(頭を抱へる。無言)

A。僕がさつき煩悶と言つたのは、富子さんの言ひなづけである君に對して、罪や責任を感じたからではない。僕はだまされたんだ。だました者に罪はあつても、だまされた者に罪はない。(問) 僕は唯さうした間違つた「愛」の結果を負擔するのが厭なのだ。

B。(顔を上げる) 厭だと言つても、爲方がない。僕はもう何も彼もこれつきりにする。君が引き起したことは、君が始末すべきだ。

A。(冷靜に) ところが、さうは行かないのだ。(問) 君はどうしても富子さんと一緒にならなければならぬ運命を持つてゐるんだ。

B。そんなことはない。親父にさう言つて、婚約を破つて貰ふばかりだ。

A。それは駄目だ。君が若し今日まで、綺麗に富子さんと生活して來たのなら、それも出来るかも知れない。(問) 併し、君にはもうその権利は奪はれてゐる。

B。それはそれで償ひの方法があらう。

A。その方法は君が富子さんを妻君にするより外はないのだ。

B。(沈黙する)

A。僕は君を氣の毒だと思ふ。實際、氣の毒だと思ふ。だから、けふまでそれが君に言へなかつたんだ。(問) 愛のない者を愛のない者として一生の伴侶にする。こんな厭なことが又と外にあらうか。君はさうした運命にぶつかつてゐるのだ。(問) 僕はそれが言ひにくいばかりに、この幾週間煩悶してゐたのだ(衣兜から又一通手紙を出す) これを見給へ——君のお父さんの手紙だ。

B。(手紙をひつたくるやうにして讀む、見る見る顔色が變る。無言)

A。分かつたか。君のお父さんは富子さんのお父さんにさういふ約束をしてゐた

んだ。(間) 東京へ一緒に出して、結婚前に、萬一伴がそちらの娘さんと關係するやうなことがあつたら、その後如何なる問題が起らうとも、お嬢さんはきつと伴の妻にするといふ約束だ……

B。(沈黙)

A。君のお父さんは涙をもつて書いてゐる——總ては聞いた。出來たことは爲方がない。唯残念なのは伴が清浄でなかつたといふことだ。(間) 幸に向うの親はまだなんにも氣がつかないである。伴と富子と一緒にさへなつて呉れば、總ては無事に解決する。(間) この上はどうしても二人を一緒にしなければ、自分の一分が立たない。どうか、あなたは諦めて、息子に是非とも一緒になるやうに勧めてくれと書いてある。一生御恩は忘れないから、どうかその一事に力を盡してくれと書いてある……

B。(拳で机をどしんと打つ) ああ、ばかだ。おれはもう駄目だ。

A。(ざとすやうに) 爲方がない。男らしく運命に忍従するのだ。さもないと、一徹な君のお父さんの生命に關するやうなことになるぞ。(間) 僕は君の親父に、死を賭してもこの事はきつと無事に解決して見せると誓つてやつたんだ。同時に、富子さんには一切の關係を絶つといふ手番を出したんだ。(笑つて) お蔭で、僕は偉大な人道主義者になることが出來たよ。

B。(嗟嘆する) ああ……

A。(教へるやうに) 一體、親と親とが、言ひなづけなごといふものを、勝手にきめるのが悪いのだ。それを又子供達が、何等の反省なしに喜んで引き受けるから間違つてゐるのだ。しかも、學生の間は兄妹のつもりであるとか何とかいふ親の命令を遵奉して、世間や友人を欺くに至つては言語道斷だ。富子さんに想を寄せてゐるものは、おれの外にも澤山あるんだ。唯、みんな偽善家だから——利害觀念が強いから——おれの進んだところまでは進めないである

んだ。君はそれを不愉快だとは思はないが。總てが嘘だ。みんな嘘だ。嘘から始まつたことは嘘に終るにきまつてゐるんだ。

B。(頭を上げる) さうだ……ほんとにさうだ。おれの今までの生活は全部嘘だつた。おれはけふからほんとの生活にはひるのだ。見す見す愛のない女だと承知でおれは富子と一緒にならう。そして、おれの強い愛の錐で、あいつのほんとの愛を突き覺ましてやらう。(間) だが、それがおれに出来るだらうか。

A。悲觀するな——おれがついてゐる。

B。うむ、頼む——絶えずおれを激勵して呉れ。

A。その代り、もう嘘はやめだぞ。眞實で行くんだぞ。富子さんの、あの嘘で固まつた魂を眞實の斧でぶち毀すんだぞ。

B。うむ、分かつた——分かつた。

小使がはひつて来る。小倉の盲縞の立襟の服を着てゐる。六十歳位。電報を持てゐる。

小使。(Aに) あの、あなたは文科の方ですか。

A。さうだ。

小使。二年の方はどこにゐるでせう。

A。僕、二年だ。

小使。(電報を見る) ヒサカタといふ學生さんがゐますか——ヒサカタケンジです。

B。(側から) 久方謙二なら僕だ。

小使。ああ、さうですか。(電報を渡す) 至急報だからつて、あなたの下宿から届けて來たんです。

B。有難う。(電報の封を切る)

小使、さぼとぼと出て行く。

A。どこからだ。

B。國かららしい。(讀む。非常に驚く)

A。ごうした。

B。富子が死んだんだ。

A。死んだ。

B。しかも自殺らしい。キシヤデシスとある。

A。なに、自殺。(Bの手から電報を奪ふ。讀む。顔色變る。無言)

始業の鐘鳴る。

B。(考へる) さあ、分からなくなつた。ことに依ると、富子はほんとに君を愛してゐたんぢやないか。

A。(考へる) うむ——僕にも分からなくなつて來た。

(稍長き間)

B。僕は大事なものをなくしたやうな氣がして來た。(涙がひもりに頬を流れる)

A。(電報を胸に押し當てる) 僕も……僕も……何か奪はれたやうな氣がして來た。(涙

がぼろぼろ床へ落ちる)

B。おい。(Aの顔を見る)

A。うむ。(Bの顔を見る)

二人、知らずに泣いてゐる。

學生達、がやがやどやどやはひつて來る。二人、顔を隠すやうにして、教壇の方へ向き直る。

第二の教師がはひつて來て、教壇に登る。

第二の教師。(丈の高い、瘦せた、目の小さい、頭の毛の鳥の巢のやうにもぢやもぢやした四十恰好の男で

ある。ノオトを見ながら、ゆつくり、ゆつくりしゃべり出す) 第三章。絶対的本原に關する意識の發達。ええ、人生が絶対的性質を持つてゐるといふこと、ええ、自我が絶対的内容を領有してゐるといふことに對する非難は、ええ、概ね甚だ幼稚なもののみである。ええ、随つて、幼稚なる説明を以て、これを排除する事が出来る。(問) ええ、生命は自然の必然的過程であつて、全然依存的相關

的のものではないか、ええ、どうして絶対的内容がその内にあり得るかど、詰問するのが普通である。然り生命が物理的必然法に支配せられ、物質的に依存する自然的過程であることは疑はない。けれども、これからどんな論理上の結論が……

學生。AとB、机の上に突つ伏して泣いてゐる。教師、知らずに講義を續けてゐる。他の生徒も気がつかないである。

—幕

許

嫁

(一 幕)

人物

火の番の老爺。七十歳。

金次郎。二十七歳。無頼漢。

「手先」と呼ばれる捕吏。三十歳位。

時代

徳川末期。

息子

場所

江戸の入口。

舞臺にはつきり見えるものは、唯粗末な火の番小屋だけである。雪がさかんに降つてゐるので、右も左も奥も前も、ただ一面に白いだけである。火の番小屋には明かりがついてゐる、障子が一枚明けてあつて、襟巻頭巾に顔を埋めた火の番の老爺が、土間で焚火をして、あたつてゐるのが見える。十二月の或晩の夜半過ぎである。

幕が明くま、「手先」と呼ばれる捕吏が、あたりに目を配りながら出て来る。二三度、火の番小屋の前を行つたり來たりする。やがて、小屋の前に立ち留り、火の番の老爺に呼びかける。

捕吏。とつつあん。まだ生きてるな。

火の番。(顔を上げる)生きてることも。誰だ。おかしな事を言ふのは。

捕吏。誰でもねえ。おれだよ。

火の番。おれはまだ死にやあしねえよ。誰が死ぬものか。

捕吏。向きになる奴があるものか。冗談だな。

火の番。冗談だ。何が冗談だ。

捕吏。生きてるなど言つたのがよ。

火の番。生きてるともさ。當り前だ。死んでつまるものか。

捕吏。分からねえな。お前、冗談が分からねえのか。かう寒くつちやあ、冗談の一

つも言はなけりやあ、とても遣り切れたもんぢやねえんだ。

火の番。そんな事を言つてると、體でもあつたまるのか。

捕吏。話にならねえ。(行きかける)

火の番。まああ、たつて行けよ。

捕吏。(火の番小屋へはひつて、手を暖めながら)寒いな。

火の番。誰がよ。

捕吏。誰つて。みんながよ。天氣がよ。

火の番。おれは寒かあねえ。

捕吏。寒いから寒いと言ふのに、何もさう怒ることあねえ。(火の番答へす) 寒いと言つたつて、おれが首になる氣遣いはねえんだ。(火の番答へす) だが、ここいらは吹きつつあらしのせむか、格別また寒いな。

火の番。なあに、もつと寒い所があらあ。

捕吏。そりやあ、あるだらう。

火の番。ちや、あなせそんな無駄を言ふんだ。

捕吏。とつつあん。お前今夜どうかしてるせ。おれはお前が寂しからうと思つて、元氣づけに話をしてやつてるんだ。揚足ばかり取つてやがる。かりにもお客だ。もうちつとやんはり口を利くもんだ。(火の番、駢をかく) え。とつつあん。(火の番、

駢をかく) 好い火の番だ。居眠り火の番か。

火の番。(目を明かないで) あんまり下らねえ事ばかり言ふから、眠くなるんだ。

捕吏。とてもかなはねえ。(小屋を出る) ちやあ、あばよ。

火の番。(冷淡に) あばよ。

捕吏。(小屋を離れながら) あばよ。頑固ぢぢい。(行つてしまふ)

火の番。(立ち上がる) 頑固ぢぢいたあなんだ。おれにやあ名があるぞ。(また坐つて、火をいぢる) あんなおつちよこちよいが、手先の何のと言つて、いばつてゐやがるんだ。やま犬一疋でも、捕まつたらお慰みだ。

(金次郎、出て来る 頬冠り、ふさこる手で、尻をしょつてゐる 火の番小屋の前まで来ると、立ち留る。火の番は圍爐裏の火をいぢりながら、金次郎に背を向けてゐる)

金次郎。ぢいさん。あたらしで貰つても好いか。

火の番。(肩越しにどろりと相手を見て) あたるが好いやな。

金次郎。ぢやあ、あたらしして貰ふせ。(小屋へはひつて、手を暖める。火の番の半身、障子の障に隠れる) 寒いなあ。

火の番。おれは寒かあねえ。

金次郎。そいつあ合せだ。おいらは寒いよ。この一月、暖まつたことがねえんだ。

火の番。お前、どこにゐるんだ。

金次郎。片門前の盲長屋にゐたんだ。あすこが又寒い所よ。

火の番。もう、そこゐねえのか。

金次郎。家賃が高過ぎらあ。(懐を明けて見せる) おいらあ、もう一文なしだ。

火の番。酒か。ばくちか。

金次郎。冗談言ひつこなしだ。おいらあ堅氣の商人だ。あきんで商賣ですつたのだ。

火の番。商賣は駄目だ。この頃のお上の遣り口ぢやあ商人は上つたりだ。お前、

烟草をやるか。

金次郎。御馳走か。有難え。

火の番。おれは遣らねえが、貰つたのがある。(棚から紙に包んだ烟草と烟管をさる) 烟管

は詰まつてるかも知れねえせ。

金次郎。なに、構はねえ。(烟管の火皿を焚火にかざして、それから細い木の枝で煙管を通す。それ

から煙草を詰める)

火の番。ひごく手が震へるな。

金次郎。(煙草をすつばすつばやり乍ら) 體が悪いんだ。頭がふらふらしてしやうがねえ。

火の番。お前、腹がすいてるんぢやねえか。

金次郎。きにようの朝食つたきりだ。

火の番。早くさう言やあ好いに。(辨當箱を持って来る) まだ一食ぐらゐは残つてる筈だ。

金次郎。有難え。有難え。(かぶりつくやうにして食ふ)

火の番。味が分かるか。

金次郎。(頬ばりながら) うむ。

火の番。腹のへつてる時、さう急いで食つちやあ毒だ。

金次郎。毒でも好い。(食ひ続けながら) だが、お前、見かけに寄らねえ親切者だな。

おらあ歸つて來てから、こんなにされるなあ始めてだ。

火の番。歸つて來たと。何處から歸つて來たんだ。

金次郎。上方からよ。

火の番。大阪か。

金次郎。(口を一杯にして) うむ。

火の番。何處にゐた。

(金次郎聞こえない振りをする)

火の番。大阪は何處にゐたよ。

金次郎。川つぶちだ。

火の番。それちやあ分からねえ。大阪は何處でも川つぶちだ。

金次郎。(慌てて) 北——北だ——北の新地だ。南にも少しゐたよ。東にもゐたな。

だが、北だな——おもにゐたなあ北だな。

火の番。何の商賣をしてゐたんだ。

金次郎。商賣。おれが商人うきんどに見えるか。

火の番。だつて、お前いま商人だと言つたちやあねえか。

金次郎。おいらあ職人だ。

火の番。ちやあ、職は何だ。

金次郎。鍛冶屋だ。

火の番。嘘をつけ。(相手の手を指さす) それが火を搦んだ手か。

金次郎。當てられた。おいらあ、實は釣るのが商賣だ。

火の番。魚をか。

金次郎。分からねえ。(賽をふせるやうな真似をする)これだ。

火の番。ばくちか。いかさまをやるんだな。

金次郎。うぶな人間に、世の中の歩きやうを教へてやるんだ。錢の使ひやうを傳授してやるんだ。

火の番。(間を置いて)おれにも一人上方へ行つてる息子があるが、有難え事に、お前のやうな奴ぢやあねえ。律氣者だ……お前、なせまともな事をしねえのだ。

金次郎。見たつて分からう。おいらにやあ出來ねえ。おいらあ生れつき、(又、賽をふせるやうな料をする)レコに出來てるんだ。世の中にやあ錢のなくしてえ人間が澤山あるんだ。おいらあ、その手合をたんのうさせてやるんだ。

火の番。ばくちはいけねえ。地獄へ落ちるぞ。

金次郎。落ちたら落ちた時よ。地獄にも大きなのが出來てるかも知れねえ。

火の番。恐ろしい事を言ふ奴だ。(目をつむって)南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

金次郎。よせやい。縁喜でもねえ。(辨當箱を返す)でも、お蔭で助かつた。有難うよ。

火の番。こなひだも、ここへ狼の辰といふ奴が來た。霰の降る暗い晩だつた。「あたらしい貫へるか。い。」「なんて言やがるんだ。「あたつたら好いちやねえか。」「おれはかう言つた。やつ、ぐしよ濡れた。火へあたるよ、湯氣が立つのよ。恐ろしい顔をした奴だつた……お前、いける口だらう。一杯やるか。(貧乏徳利を出す)

金次郎。(驚いて)いけねえ。そいつあ一つたらしもいけねえんだ。

火の番。お前、こなひだお仕置になつた赤羽橋の人殺しを知つてるか。

金次郎。うむ。あいつあ、おれの幼馴染だ。

火の番。あいつがお手當になつたのは、おれのせゐだ。あいつもここへあたりに来やがつた。

金次郎。(平氣で)ふむ。縁があつたんだな。

火の番。殿様傳次は、捕まらねえ内に咽喉を突きやあがつた。あいつも名高え奴だ

つた。

金次郎。傳次たあ四つ目で一緒にゐた事がある。

火の番。あいつもここへあたりに来たんだ。咽喉を突く前に、おれに小判を一枚呉れて行つた。まだ持つてらあ。

金次郎。お前、それを使はねえのか。

火の番。使はうと使ふまいと、おれの勝手ぢやねえか。

金次郎。勘忍して呉れ。いつもの癖だ……だが、咽喉が渴いた。一杯やつて見るかな。(貧乏徳利をとつて、口から飲む——直ぐ、いやな顔をして、口の中の物をほき出す) ぺつ。ぺ

つ。こりやあ何だ。

火の番。茶だ。茶だよ。

金次郎。おつそろしく冷てえ茶だ。こんなものを夜中に飲ませるごぢがあるか。おいらあ、茶なんてものは、もう何年にも飲んだ事がねえ。

火の番。酒ばかりくらつてゐるんだらう。

金次郎。酒ぢやあねえ。泡盛だ。

火の番。泡盛は毒だ。

金次郎。へ。「ばくちはいけねえ。」……「泡盛は毒だ。」……さうだ。今に「烟草は命とりだ。」と来るだらう。

火の番。さうだとも。烟草だつて、好い事はねえ。

金次郎。分かつた。分かつた。もう、よしねえ。もう、なんにも飲まうたあ言はねえから。

火の番。一體お前、何しにこんな所へ来たんだ。

金次郎。え。それはその、いろいろ用があるからだ。

火の番。かう、何かきまつた用はねえのか。

金次郎。そりやあ、ねえ……いや、ある。(調子を變へて) ちやんとお袋を探しに来た

んだ。

火の番。めつかつたか。

金次郎。分からねえ。

火の番。分からねえ。

金次郎。會つてくれるかどうだか分からねえんだ。

火の番。ちやあ、ゐごこは分かつてゐるんだな。

金次郎。う。うむ。大抵ゐごこは分かつてゐるが、おいらが行つたつて、合つてく

れるかどうだか、それが分からねえんだ。

火の番。そりやあ會つてくれるとも。やつぱり、お前のやうな事をしてゐるんだら

う。

金次郎。なせよ。

火の番。蛙の子は蛙よ。昔からきまつてゐらあな。

金次郎。(變な氣持で)さうかね。(居すまひを直す)

火の番。お前、くたびれたらう。そんなに堅くなつてるからだ。もつと樂々とあたりねえ。

金次郎。これで澤山だ。

火の番。もつと火の側へ寄りねえつて事よ。

金次郎。これで澤山だ。

(問、金次郎、何か言ひさうにする)

火の番。なんだ。

金次郎。お前の息子の事を考へたんだ。上方へ行つてると言つたな。して見ると、ごつかでおいらが會つてゐねえものでもねえ。名は何と言ふ。

火の番。會ふ氣遣えはねえ。おれの息子はまつたうな人間だ。

金次郎。それは分かつた。名を言つたつて好いちやあねえか。

火の番。金公よ。金次郎つてんだ。

金次郎。(静にひそり頷く) うむ。それちやあ。會つた事はねえ。

火の番。當り前だ。九年前に江戸を出て行つた——十九だつたよ。その時な、商賣は金物よ。今ちや立派にやつてらあ。

金次郎。飛んでもねえ。

火の番。何が「飛んでもねえ」だ。

金次郎。どうして、立派にやつてる事が分かるんだ。

火の番。さうに違えねえもの。

金次郎。たよりはねえのか。

火の番。まだ、ねえ。

金次郎。まだだと。九年も立つてるのにか。

火の番。忙しいんだ。せつせと稼いでるんだ。もう大したものになつたに違えねえ。

金次郎。さうありてえものだ。だが、若し、ぢいさん。若しさうでなかつたらどうする。

火の番。そんな事がありやう筈がねえ。あいつはまつたうな人間だ。

金次郎。又まつたうだ。まつたうだつて、思わく違えといふものがあらあ。

火の番。馬鹿の言へ。あいつは子供の時から、近所の褒め者だつた。酒も飲まねえ。ばくちは元よりだ。どうしたつて出世をする男に出來てるんだ。

金次郎。いつも、さうとはきまらねえ。

火の番。だが、あいつはさうだ。

金次郎。だが、どうして……(言ひ淀む)

火の番。どうしてだと。何がどうしてだ。

金次郎。だからよ……その……だからよ。(問ふべき事を考へる) 誰かにたよりがあつたのかよ。

火の番。うむ……一度あつた。

金次郎。誰によ。

火の番。(にがい顔をして) お前の知つた事ぢやねえ。

金次郎。ふむ。ぢやあ、お前の嫌ひな人間にでもたよりがあつたのか。

火の番。(少く熱して) 近所の娘のところへ手紙をよこしやあがつたんだ。向うへ着くと直ぐに書きやあがつたんだ。いやらしい手紙よ。「故郷が戀しい」なんて書きやあがつて。

金次郎。そりやあ戀しいだらう。

火の番。(怒つて) 稼ぎに行く奴が、故郷が戀しいもねえもんだ。その娘め、件と夫婦約束がしてあるなんて言やあがつた。ばかばかしい。だから、おれはさう言つてやつた。もうみんな忘れちまつてらあつてよ。

金次郎。う。うむ。娘ももうお前の息子の事は忘れちまつてるだらう。もうすつ

と前によ。

火の番。ところが忘れねえんだ。まだ、それを言つてやがるんだ。

金次郎。なんだと。それぢやあ、まだ嫁に行かねえのか。

火の番。かう諸式が高くつちやあ、うつかり嫁にも行けねえのさ。おまけに、好い時分を逃がしてしまつちやあな。

金次郎。(熱心に) ところで、おいらお前に一つ聞きてえ事がある。こりやあ、唯、その、お前の考へが聞きてえんだ。よしか。若し、お前の息子がしくじつたとするな。そいつが、困つて、歸つて來たとするんだ……運が悪くてよ……以前とは違つてよ。牢にでもへえつて來たとするんだ……

火の番。(怒つて) お前、うちの金次郎の事を言つてるのか。

金次郎。さう怒つちやいけねえ。おいらあ、唯お前の考へが聞きてえんだ。

(捕吏が出て來て、火の番小屋の横に身を寄せ、そつと二人の會話を聞いてゐる)

火の番。よせ。さつきから言つてるぢやねえか。息子はそんな奴ぢやあねえよ。

金次郎。だが、人間には運不運といふものがあつた。

火の番。稼ぐ人間に運も不運もあるものか。

金次郎。でも、病氣をするとか怪我をするとかしたらどうする。

火の番。そんなら手紙をよこす筈だ。

金次郎。若し手紙をよこさなかつたら……

捕吏。(前へ出る) 若いの。そのぢいさんにかつたつて無駄だ。しやれも冗談も

分かる親爺ぢやねえんだ。

火の番。又來たな。また何か冗談を言ひに來たのか。

捕吏。さうだ。寒くつてたまらねえ。

火の番。この若いのは冗談を言つてるんぢやねえんだ。

金次郎。さうだとも。おいらあ、唯、ぢいさんの考へを聞いてるんだ。聞いたつて

しやうのねえのは分かつてるんだが。

捕吏。お前、この頑固ぢいを知つてるのか。

金次郎。どうして。知るわけがねえや。

捕吏。知つてねえとも限らねえ。だが、ぢいさんの言ふ事を聞いてりやあ間違ひは

ねえよ。

火の番。それも冗談か。

捕吏。やつと分かつたか。

金次郎。(立ち上がる) ぢやあ、もう行くせ。大きにお世話だつた。

火の番。まあ、坐れ。さう急ぐこたあねえ。

金次郎。うむ……だが……

捕吏。おれの顔を見て、直ぐ出かけると、お前うらんと思はれても爲方がねえぞ。

金次郎。お前さん、何の商賣だ。針でも賣るか。

捕吏。なせよ。

金次郎。ちくうり刺すからよ。

捕吏。笑つて。こいつあ好い。

火の番。若いの。とても上方にやあるめえな。こんなお手軽なお手先様は。

捕吏。(金次郎に) お前、上方から来たのか。上方は何處にゐた。

金次郎。堺だ。

火の番。お前、さつき大阪だと言つたぢやねえか。

金次郎。堺に一番長くゐたんだ。

火の番。ぢやあ、さつき、なせ大阪にゐたなぞと言つたんだ。

金次郎。大阪の話が出たから、大阪にゐたと言つたんだ。さう揚足が取りたけりやあ、相撲どりにでもなるが好いや。

捕吏。(金次郎に) お前、上方で何をしてゐた。

金次郎。町奉行をしてたかも知れねえ。だが、生憎さうちやあなかつた。

捕吏。ぢやあ、何をしてゐたんだ。

金次郎。川口で荷揚をしてゐた。

火の番。(驚いて) お前、さつきは……

金次郎。(烈しく火の番を睨みつけて) 黙つてろ。ぢぢい。

火の番。(啞くやうに) さうか。それで分かつた。そんなら、さうと早く言やあ好いに。

捕吏。とつつあん。どうした。目を白つ黒 てるぢやねえか。

火の番。(捕吏の方に向き直つて 烈しく) お前の知 た事ぢやあねえ。どうして、さうお前は疑ぐり深えんだらう。さう人の事に一々口を出もんぢやあねえ。

捕吏。(驚いて) どうした。どうした。おれは唯當り前に聞いてゐるんだ。(金次郎に) 役目だけで聞、んだ。返答をしてくれるか。

金次郎。(不安心に) するとも。

捕吏。よし。

金次郎。お前さんの来た時、おいらあぢいさんの考へを聞いてゐたんだ。火の番。さうだ。ばかな事を聞いてやがつたんだ。うちの金次郎がさうだのかうだのと。

金次郎。やつぱり、おいらあもう行くせ。大きに世話だつた。御免ねえ、旦那。

捕吏。まあ、待て。ちよつと氣になる事があるんだ。

金次郎。冗談ぢやねえ。(行きかける)

捕吏。まあ、待て。行くな。ごうも、お前はおれの尋ねてる代物らしいぞ。(捕吏も

動かない。金次郎も動かない) お前、おれのごへ来て、一晚暖まつたらごうだ。夜ぢゆう雪ん中をうろつくよりやあ好いせ。ごうだ。

金次郎。それにやあ及ばねえ。

捕吏。大方さう言ふだらうと思つた。

(捕吏、いきなり小屋へ飛び込む。金次郎、すりぬけるやうにして、小屋を躍り出る。直ぐ姿が見えなくなる。捕吏帯の間に呼笛を探りながら、あとを追ひかける)

火の番。やつぱり、さうか……(小屋を出て、遠くを透かして見る。呼笛鳴る。火の番、雪に手をかざす。呼笛また遠くで鳴る) あいつ一人ぢや駄目だらう。(間) 見えねえ。(間) 角を曲がつたな。(すつと遠くで、呼笛が鳴る) いくら吹いたつて聞こえるものかな。(呼笛の音が少し近くなる) や、又こつちへやつて来たな……(延び上つて見る) さうだ。(すつと近くで呼笛が鳴る) また角をこつちへ曲がつたな……(小屋へはひる) 人の事だ。引つ込んでのより。(障子を少し引く)

(呼笛、直ぐ近くで鳴る。金次郎、息を切らして、駈けて来る。小屋の前で轉ぶ。捕吏、あとを追つかけて来て、金次郎の起き上がりかたを捕まへる)

金次郎。(喘きながら) よし。捕まつた以上は神妙にする。

捕吏。神妙にするぞ。感心な奴だ。まあ面を見せろ。(金次郎の顔を火の方へ向ける)

金次郎。(反抗して) 神妙にするから……そんな事はするな。

捕吏。火の側へ来い。

金次郎。(烈しく抵抗する) お前、おいらの面に見知りはないや。

捕吏。ちぢいに見せるのだ。

金次郎。いけねえ。そりやあ、いけねえ。(烈しく抵抗する)

捕吏。見せねえか。ぬすつと。見せねえか。

金次郎。(急に抵抗するのを止める)

捕吏。見せるか。

金次郎。爲方がねえ。どうともしろ。

(二人、火の側へ歩み寄る。不意に、金次郎、身を屈めて、捕吏の兩足に抱きつき、捕吏を仰向けに倒す。金次郎、逃げる)

捕吏。(はれ起きて) 畜生。(あゝを追ふ)

(金次郎、直ぐ又小屋のうしろから出て来る)

金次郎。見當違ひへ行きやあがつた。(呼笛鳴る。金次郎、小屋を覗く) ちいさん、あばよ。

火の番。(少し顔を出して) あばよ。達者でゐねえ。

金次郎。何か。お前んとこの婆さんは達者か。

火の番。ばあさんは死んぢまつた。

金次郎。死んだ。息子の歸るのを待たねえでか。

火の番。何を言つてるんだ。早く行け。達者でゐろよ。

金次郎。(聲を飲むやうにして) ちやん。

(金次郎、逃げ去る。呼笛遠くで鳴る。火の番、嘲笑ふ)

—幕

息子の由來

十何年か前に蘇格蘭レバアトリー・シアタアといふ劇團が採用した新進作家の小さい一幕物が、グラスゴオの或本屋からシリーズになつて出たことがありました。いづれも「小劇場」向きのものばかりで、多くは蘇格蘭の土語で書かれたものでした。

私はふと丸善でその内の一冊を見つけて、読んで見たところが、ダイアレクトが多いので中々分からなかつたのですが、題材はいづれも日本の現代にもありさうな事ばかりなので、そこに興味を覚えて、段々に註文をして一通りこのシリーズを集めて見ました。

シリーズの中にはブリグハウスの『石炭の價』といふのだの、コルクフウンの『ジ

ヤン』といふのだの色々ありましたが、中でも私が一番面白いと思つたのはハロルド・チャピンといふ人の書いた『オオガスタスその父を探す』といったやうな題の一幕物でした。

その後又何年か立つて——もうその時分はチャピンも可なり有名な人になつてゐましたが——私が市村座に關係するやうになつた時、亡くなつた田村成義氏から、何か西洋の短い物で餘り日本の人情とかけ離れてゐないやうなものはないか、日本の舞臺に直ぐ書き直せさうなものはないかといふ相談を受けたことがありました。

その時、私は偶と思ひ出したのは、このチャピンの作でした。そこで、うろ覚えの筋を話して見たところが、それが大層田村先生の氣に入りました。やがて菊五郎君にも話したところが、是非日本の舞臺にして書いて見て呉れないかといふ事でした。

併し、もうその時分はチャピンの本さへ何處の下積になつてしまつたか分からな

い時分だつたので、一度引き受けはしたのですが、つひその儘になつてゐました。

その内に、或必要があつて如阜の切られ與三の脚本をすつかり讀んで見ましたところが、あの火の番小屋の場面が可成りよくチャピンの作に似てゐるのです。そこで私は、こんな好いものが日本の古劇にあるなら、何も苦しんで西洋のものを書き直す必要はなからうといふ風に考へて來ました。

そこで、どこにも角にも、この方を先きに實演の出来るやうにアレンジして見て、『與三郎』といふ題をつけて三田文學へ出して見ました。併し、これは菊五郎君の手には掛からずに、偶然にも新歌舞伎研究會で幸四郎君と勘彌君との手に掛かる事になつてしまひました。

併し、その後も度々田村先生から、チャピンの作の話が出るので、いつか一度は書かなければならぬと思ひ／＼してゐる内に、たうとう田村先生も亡くなつてしまひ、私も市村座の座員ではなくなつてしまひました。

併し、亡くなつた田村先生に對する約束は是非一度は果さなければならぬと思つて、始終氣にしてゐたのですが、丁度去年の春少し暇があつたので、やつとその約束を果すことが出来たのです。それが、あの三田文學の七月號に載せた『息子』なのです。

以上申したやうなわけで、『息子』は純粹な私の創作ではないのです。書く前に、チャピンの本も探し出して、もう一度讀み直しました。『息子』に若し少しでも好いところがあれば、それはチャピンの功で、私の功ではありません。

私は『第一の世界』以後、少しでも翻案めいた爲事はしない事にしてゐるのですが、これは前からの約束なので、自分で自分に或ジャストフイケエションを與へてゐるわけなのです。

ところで、自分の書いたものを自分でさういふのは可笑しいと思ひますが、『息子』は演出の中中むづかしい芝居です。私は自分がレジイをしなければ到底物にな

るまいと思ふので、若しやる時は、こつちから望んでも演出に手を出すつもりでゐます。装置と照明は市村座との關係上田中良君と遠山靜雄君とがやつて呉れるでせうから、可なり心丈夫です。

芝居の内容は説明をすべきものではないと思ひますから、舞臺で見て頂くことにいたします。(大正十二年二月四日)

戯曲創作の前後

『第一の世界』に就いて

戯曲創作の前後
『第一の世界』に就いて

(一) 上場前の感想

自分の作に就いて一言でも何か説明じみた事を書くといふ事は耻づべき事です。それが一つの作品である以上、作品それ自身で總てが終つてゐる筈です。作品を發表して、そして、それから、その作品に就いて、作者自身が何か書くといふ事は、作者が自分の作品に就いて、或不安を感じてゐる證據です。即ち發表すべからざるものを發表した證據です。

と言ふ意味は、勿論發表せられた作品その者の巧拙や成功不成功やに關する問題ではありません。藝術的良心——それは倫理的良心の或面です——に關する問題です。

私が今、自分の作品に就いて、何事をか書かうとするのも、その「不安」があるからです。併し、私の「不安」は今述べたものとは、少しく性質を異にします。私は良心を盡して、この作を書き上げたと信じてゐます。これを發表しても、發表すべからざるものを發表したとは思つてゐません。

私の「不安」は、それが處女作——最初の作——であるといふ事から起つて來てゐます。

私は學生時代に極めて内容の貧弱な五幕物の新派劇じみたものを創作した事がありません。

それから、脚本らしい體裁のもので、「同じ事」といふものを發表した事がありました。併し、それは「對話」に過ぎませんでした。「對話體の短篇小説」以上のもの

ではありませんでした。「俊寛」といふ一幕物を發表した事がありました。これも平家物語の一部に、ほんの少し許り自分の「趣向」を加へて、脚本の體裁にアレンジしたものに過ぎませんでした。「伊左衛門」や「與三郎」が近松や如阜のアレンジメントである事は論を待ちません。その他のものは、みんな翻案か焼直しです。實に、實に恥づかしい、人間として最も下等な爲事をしたのでした。

私は、兎にも角にも、『第一の世界』で、始めて、戯曲の作家としての自分を試みたのです。

私は可なり長い間演劇の事に關つてゐます。併し、舞臺を一つの藝術として扱ふといふ事と、戯曲を創作するといふ事とは、全く別な事です。

それ故、舞臺或は演出といふ事に就いて、少しは知る所があると信じてゐる私も、戯曲を創作するといふ事に就いては、全く無智だと言つても好いのです。

勿論、戯曲創作の原則と言つたやうなものは、物の本で多少は學んでゐます。他人の作品を批評するだけの資格は、あながち絶無だとも思つてゐません。戯曲が演劇になるまでのプロセスに就いては、或は多くの人より詳しく學んでゐるかも知れません。併し、或戯曲家の頭の中で、或戯曲が芽を吹いて、それが一本の木になるまでの経験を、自分自身で嘗めたのは、今度が始めてです。

私はこの一つの作をした爲に、實際二十年から若返つたやうな氣がします。同時に、その結果に就いては、二十年以前の年若な恥づかしさと不安を感じます。

私がこの作を書き下す前に、自分で定めた態度はかうでした。

- (一)「時間」と「空間」との問題の外、何等の「舞臺的束縛」をも受けるな。
- (二)唯「人間」を書け、「人間」と「人間」との關係を書け。それ以上を書くのはまだ早い。

(三)強ひてテーマを作り出さうとするな。テーマは自然に生れて來るもので、作り出すべきものではない。苦し、テーマがあるなら、宇宙人生を包むやうな大きなテーマであれ。

(四)あらゆる Theatricalities (芝居らしき事)から解放せられよ。何となれば「芝居らしきこと」ほど「芝居」の力を微弱にするものはないから。

(五)問題を提示しようとするな。なせなら、自分はまだ ultimate な問題を提示する程深い哲學は持つてゐないから。

(六)問題が自然に出て來ても、強ひてそれを解決しようとするな。藝術の目的は問題の解決ではない。

(七)愛情を以て——實に細かい愛情を以て——舞臺へ出て來る一人々々の人物を扱へ。どんな軽い役目でも、決して憎んだり蔑んだりしてはならない。